

# 十全同窓會會報

〒920-8640  
金沢市宝町13の1  
金沢大学医学部  
十全同窓會  
編集委員会  
印刷/ヨシダ印刷(株)

## 創立百五十周年記念事業の進捗状況

井 関 尚 一

七月二十五日の時点で、寄附金額は四七六〇万円となりました。前回報告の三月一日の時点から約二六〇万円の増加になります。これまでの寄附に対して心から御礼申し上げます。記念事業計画は、本年六月二十三日に行なわれた今年度第一回の準備委員会全体会議、および七月二十六日に行なわれた準備委員会と十全同窓会の合同会議において、かなりの進展を見ました。まず医学部創立百五十周年記念誌(百五十年史)については、通史、教室史、余滴、写真のグループごとに鋭意編集を進めています。当初の想定より内容が増え、なかなか大変な作業になっています。装丁のうえでも最近出版された東京大学の百五十年史に見劣りしないものになりたいと考えております。金沢美術工芸大学に依頼し、来年中頃までに完成予定の金沢医学館初代卒業生の群像をモチーフとした記念モノUMENT(若き医師たち)の設置場所については、医学

類正面玄関付近のいずれかの場所ということに決定しました。キンストレーキ修理記録のデジタルアーカイブ(DVD)作成については、音声による解説を加える作業を業者に委託したところです。作成部数および頒布時期と方法は、百五十年史のそれらとの兼ね合いもあり、まだ決まっていません。金沢医学館跡地である大手町の市医師会館の敷地に石碑を設置する件については、全学による彦三痘所跡地の除幕式の翌日、市医師会の創立記念日でもある本年十一月六日に除幕式を行なうことが決定し、それまでに石碑を作製することになりました。すでに具体的な設置場所も決まり、金沢医学館跡地の揮毫を中村信一学長にお願いし、また碑文は寺畑喜朔理事の原案をもとに作成し、すでに業者に発注しました。創立百五十周年記念式典については、前回にもお伝えしたように、二〇一二年七月七日(土)に行なうことが決定しています。

午前中に医学部記念館での十全同窓會總會および十全医学会總會に続いて十全講堂で記念式典および特別講演(十全医学会シンポジウムを兼ねる)を行ない、昼から記念モノUMENTの除幕式に続いて医学類構内(野外を含む)で昼食会を行って、夕方には終了という予定です。特別講演は、免疫学者で京都大学客員教授の本庶佑氏と、建築家で東京大学名誉教授の安藤忠雄氏に決定しました。

今後着手する記念事業として、従来から十全講堂前のプロムナード整備と医学部記念館改修を挙げてきましたが、プロムナード計画の一部であった医学類正門付近の整備計画が、メインの事業として浮上しました。これは、医学類正門を現在よりも附属病院寄りの、十全講堂前道を延長した場所に移設し、現在の正門から続く駐車ゲートを含む斜めの道路は閉鎖して緑地化するということです。新しい門を入ると正面に十全講堂が見え、また医学類玄関前は現在の松の木々や高安像がある部分を含めて広い緑地になり、そこに若き医師たちのモノUMENTがある、というのがひとつの案です。新しい正門は百五十年の歴史を持つ大学にふさわしい重厚なものとして考えています。例えば、旧制医科大学時代の正門を、門柱間を拡張したうえで復元することが考えられます。現在、医学類正門付近の整備計画案とそれに要する経費の見積もりを角間の施設部に依頼しています。とりあえず完成イメージ図が一枚出来上がりしたので同封します。現在頭を悩ませているのは、正門付近整備計画の最終的な内容が寄附金の額しだいで決まり、その着工は早くても来年度末以降になるのに

### 目次

創立百五十周年記念事業の進捗状況	1
東日本大震災報告	2
総会記事	5
教授就任挨拶	6
春の叙勲	6
総会記事	7
総会特別講演抄録	9
追悼文	12
論説	13
受賞	14
学会報告等	15
金沢大学関連病院院長会議	17
御遺骨返還式・合同慰霊祭	17
医学展開催に向けて	18
十全学術行脚 第二十一回	19
病院紹介	22
教室だより	24
支部だより	26
クラス会	29
医師会コーナー	30
医学部百五十年史のための覚え書【32】	31
十全昔話	32
学生コーナー	33
平成二十三年度オープンキャンパス	34
金沢大学学友会設立総会	34
第五回ホームカミングデイの案内	34
編集後記	34

対して、モニメントの設置は来年七月日の除幕式に間に合わせねばならないことです。整備計画のなかでモニメントの設置場所をあらかじめ決めておき、その部分を先行して整備するのか、その場合にまだ存続している斜めの道路や高安像との位置関係をどうするのか、などの問題があります。これまで募金事業の趣意書はホームページ上にしかありませんでしたが、上記の計画を含めて記念事業全体の収支見積もりを含めた新たな趣意書を作成し、ホームページに載せるとともに印刷物とし、今年度中に企業等にも寄附の依頼をする予定です。募金の最終期限は二〇二五年度末に設定されていますが、当面の目標を二〇二二年度末とし、その時点での寄附金をもって正門付近整備事業を着工したいと存じます。二〇二二年度末までの募金目標額は、着工済みの事業も含めて一億円余になるとは思いますが、すでにその半額近くが集まっておりますので、可能な数字ではないと考えております。

以上、ご報告いたします。大震災後の経済活動の停滞もあり、万事ご多端のところまことに恐縮ではありますが、まだご寄附を頂いていない会員におかれましては、またすでにご寄附を頂いた会員におかれましては、改めて記念事業達成のための募金の趣旨にご賛同くださり、よろしくご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。今回再び振込用紙を同封いたしましたので、ご利用いただければ幸いです。なお、記念事業の趣旨については医学部創立百五十周年記念事業のホームページ [http://www.kikin.kanazawa-u.ac.jp/kikin\\_medi50/](http://www.kikin.kanazawa-u.ac.jp/kikin_medi50/) をご覧ください。

## 東日本大震災における津波、災害医療を経験して

前岩手県立大船渡病院外科長  
現 国立病院機構水戸医療センター外科医長  
小山田 尚こやまだ のぞみ (昭和六十三年卒業)

私は、昭和六十三年に金沢大学を卒業後、東北大第二外科に入局、平成十五年から大船渡病院に派遣されました。八年勤めた大船渡病院からの異動が決ま

り、転勤を目の前にしてこの震災に遭うこととなりました。県立大船渡病院は、岩手県の沿岸大船渡市の高台にあり、大船渡市と近隣の陸前高田市、住田町の

気仙沼地区人口八万人のなかで手術を行う唯一の病院で、救命救急センターを併設、病床数四七〇でした。外科では年間全麻手術数約五〇〇の病院で、私は外科長として七人の外科医とともに働いていました。当日の様子は次のようでした。

三月十一日、一見普段通りの金曜日、夜には陸前高田市に出かけての送別会が予定されていた。手術も予想外に早く終了したところで激しい揺れを感じた。大きな地震ではあったがこの地ではもう何度か経験した大きな地震で、並列でやっていた手術は大丈夫かと考えながらも、集中治療室の人工呼吸管理

中の患者さんの安全を確かめた。そして、毎年行っていた地

震、津波訓練のマニユアル通り、外科医は救急センター外来に集合し、重症者(レッドゾーン)治療のリーダーとして患者さんの来院に備えていた。津波からの避難を呼びかける放送が鳴り響く中、しばらくして、町が波に飲み込まれている、ビルも三階以下は波をかぶっていると上の階から知らせが入った。まさかと思いつながら階段を上ると町が真っ黒な泥と思えるような海水に浸かっている光景が見えた。自宅もある一万人以上は住んでいる地域がすっかり黒くなっていた。これは大変なことになる。私の家族は、子供はまだ学校、さすが



震災当日の大船渡市街



津波が去った後の大船渡市街



自衛隊ヘリによる患者搬送

に嫁は逃げただらうと思ひ、助けるべき患者さんを待つことにした。しかし、患者さんはやってこない。病院の駐車場は避難してきた車でどんどん埋まっていた。時間も、けが人はほとんど来なかった。一時間ほどして患者さんが搬送され始めたが、レッドゾーンには来ず、歩いてグリーンゾーンに行く人、トリアージで黒タッグが着けられ安置所に運ばれていく人がほとんどであった。そして、意外と静かな夜を迎えることになる。重度外傷、溺水、肺塞栓など、訓練ではほとんど運ばれてくるはずの患者さんが来ない。ラジオでは大船渡市の半分が被災、いくつかの海岸の地域とは連絡が取

れない、陸前高田市は壊滅などの情報も流れてくるが、患者さんはそれほど来ない。そして気づいたのだ。助けるはずの患者さんもうすでに亡くなってしまうと。

大船渡市の人口四〇、〇〇〇人のうち約五〇〇人、陸前高田市二二、〇〇〇人のうち約二、四〇〇人が死亡、行方不明となりました。医療圏の人口が八万人のこの地域で約三、〇〇〇人という死亡、行方不明の数は、私が大船渡病院に八年勤務して執刀した患者さんのざつと二倍にあたります。私が診ていた患者さんも多数亡くなっていました。医療過疎

のこの地域の皆さんの健康を守ろうと自分なりに努力してきたつもりではありましたが、これをたった一日で凌駕する災害の恐ろしさ、自分の無力さを感じたものでした。

翌日からは避難所などから低体温症の患者さんが運ばれ、外傷の患者さんがやって来て、全く不通だった陸前高田からも患者さんが運ばれてきました。それよりも大勢やってきたのは身一つで逃げ、常用薬を流された人々、透析の水道や酸素など供給がストップしたために当院で対処しなければいけない慢性疾患の患者さんでした。仕事は当然、大変といえば大変だったのですが、みんながそういうことも忘れて働いていました。ただ、行方が分からなくなった同僚がいたり、病院のスタッフに

は家族が行方不明の者が約一〇〇人、家を失った人が約一〇〇人いました。この病院全体が、誰もが誰かを亡くし、いろんなものを失い、悲しみに包まれた中で、津波で壊された街を見ながら仕事を続けていたということが何よりつらかったこ



とでした。こういうときに手を差し伸べてくれた仲間があります。DMATは震災初日から駆けつけていただき、大船渡病院には遠く北陸三県からもいくつかの

金沢大学医学部十全同窓会会長 殿  
会員各位

残暑の中にも秋の気配が漂ってきましたが、先生方におかれましてはご清栄のことと存じます。五月には遙々岩手の大船渡まで来ていただき、お見舞いをいただき、大変ありがとうございました。その後、私は七月から大船渡を離れ、国立病院機構水戸医療センターに転勤となりました。すっかり遅くなりましたが、やっと落ち着いたところで、大船渡での震災被災について、文章を書かせていただきました。拙稚な文章で恥ずかしいところですが、もしよろしければ、会報、報告などに使っていただければ幸いです。

加藤理事長が大船渡に来られたことは、大船渡病院の同僚の間でも驚きと感嘆の声を聞きました。いろんな出身大学の先生が集まった病院ですが、同じようなことはなく、非常にうらやましがられた次第です。

おかげさまで、岩手県支部のほうも立ち上げ、とにかく一回集まろうということで、計画を練っているところです。私も水戸から、岩手に帰って参加しようと考えています。

季節の変わり目ですが、先生方におかれましてはお身体に気をつけられ、ますますのご活躍をお願いいたします。

小山田 尚  
国立病院機構 水戸医療センター外科

(写真は加藤理事長よりお見舞いをうける小山田先生)

D M A T が支援に来てくれました。医師会、J M A T の支援も後を追って多人数の支援をしてくれました。また、私としては大学の医局からの支援は目的に合っ、かつ迅速に支援していただき大変力になったと思っています。これらの支援は業務量の増加に対応していただいたことはもちろんですが、情報もなく一部孤立した状態になったところに果たしてくれた精神的サポートは計り知れないものがあつたと思います。同じように、二週間してやっとながった、電話、メールには金沢の同級生からも含め多数の安否を気遣う連絡、励ましがあり大変心強い思いをしました。そしてずっと恩返しをすることもできていなかった金沢大学医学部から、十全同窓会理事長の加藤聖教授が自ら三陸、大船渡に足を運んでいただきお見舞いをいただいたことにはほんとにありがたく思いましたし、母校の暖かさと誇りを感じました。

本当にこの度は、皆さんにご心配をおかけしました。周囲には多数亡くなった方がおり、外科の同僚には肉親を失ったものが二人いる中で、私、家族が元気にいられることは、何より幸せなことと思っています。さらに、こうして母校、同窓生をはじめ、いろいろな方とのつながりを再認識させていただきました。家財を失いはしたのですが、それよりも大事なものに囲まれて生きていたのだという実感を深めることになりました。また、加藤理事長に来ていただいたことをきっかけに同窓会岩手県支部の活動も再開する運びとなりました。厚く御礼申し上げます。

## 東日本大震災被災地支部への

### お見舞い報告

本年三月の東日本大震災では、岩手、宮城、福島、茨城各県支部の本同窓会員の皆様にも甚大なる被害が発生しましたが、幸いお亡くなりになられた方や行方不明の方はいらっしゃいませんでした。しかし大船渡、南三陸町、気仙沼では家屋や診療所を全壊、流失された方が数名いらっしゃいました。三月の理事会の議を受け、本同窓会としてこれら四県支部へお見舞いを申し上げます。去る五月三十日、六月一日にかけて、私が四県を訪問しお見舞いの言葉と見舞い金をお渡しして参りました。岩手、宮城両

県では特に甚大な被災を受けられた会員に直接お会いし、震災、津波等の生々しいお話しやら、患者さんの搬送等のご苦労をお聞きして参りました。途中、陸前高田市の被災現場も訪れ被害の大きさに改めて驚きました。また福島では、二本松市の鈴木孝雄（昭和三十二年卒業）福島県支部長とお会いし原発事故や避難住民のお世話や診療について現状をお聞きしました。最後に茨城県支部の諸岡信裕（昭和四十八年卒業）幹事を訪ね会員の皆様の被災状況をお聞きしました。

（加藤 聖 記）

## 東日本大震災被災地への「このころのケアチーム」に参加して

金沢大学附属病院 神経科精神科

戸田 重 誠

この度私は、金沢大学神経科精神科から、「このころのケアチーム」に加わり、東日本大震災の被災地の一つ、宮城県石巻市に赴く機会を得ましたので、その時の活動を簡単に報告させていただきます。石川県は震災間もない三月十六日から、県立高松病院の部隊を筆頭に、宮城県石巻市に「このころのケアチーム」の派遣を開始しました。私が参加したのは、第九班（四月二十五日～五月一日）で、チームは県障害保健福祉課職員、県こ

この健康センターの保健師とPSW、金沢市障害福祉課の手話通訳者、そして医師（私）の五名からなる構成でした。石川県チームは石巻市医師会館を活動拠点とし、市中心部を斜めに横切る北上運河と、東西に走る大街道（おおかいどう）に沿った地域の避難所及び家庭訪問を担当していました。多くの場合、学校が避難所に指定されており、その入り口には行方不明の家族知人を捜す伝言が所狭しと掲示されていました。避難所では、まず担当者及び住民のリーダーとコンタクトをとり、以前診察を受けた方と、新規に診察希望の



写真左より、鈴木福島支部長夫妻、加藤理事長

方（あるいは周囲から見て懸念のある方）について情報を得ることから始めるのですが、避難所の担当者は市の職員であったり、日赤の看護師であったり、あるいはボランティアであったり、全くまちまちで、交代も頻回でした。結局頻回に顔を出すことで住民リーダーの方に我々チームを憶えてもらい、信頼関係を築くことが必要でした。予想外だったのは、日中に避難所を訪問すると、住民の方が殆ど不在だったことです。当時は天気も良く、体の動く者は、壊れた自宅の片付けや、行方不明者の捜索に出払っていたのです。そのため、皆が戻ってくる夕食配給時に合わせ、出直す必要がありました。診療活動の実際ですが、決して不眠や抑うつを訴える方が列をなして待っていた訳ではありません。面談をしたのは、

総会記事

平成二十三年度 十全同窓会総会開催

一日平均五人程です。被災住民の多くは、眠れなくとも、家を失って茫然自失であつても、何とか気力を振り絞り、いつもより活動的に過ごしていたのです。しかし当時既に震災発生の日から一ヶ月半が経過し(ちょうど「四十九日」頃に当たっていました)、特にこれまで頑張ってきた避難所のリーダーたちに疲労の色が濃くなつていました。すぐ座り込み、ため息ばかり着いている方も見受けられました。眠剤を勧めても、「夜中に目が覚めない」と困るから」と固辞されたりしました。当時は大きな余震があると、自宅

に戻っていた住民がまた避難所に集まることになつており、避難所の責任者である彼らは、昼夜気が休まる事がなかったのです。発達障害のお子さんが、慣れない避難所生活に適応できず、騒いでトラブルを起こし、家族ごと学校の配膳室に隔離されたりしていたケースもありました。このような事例は、薬で解決するのがベストとは限りません。ちょうどその頃、避難所に指定された学校では授業が再開され、住民の方々は、それまで居住していた教室から、体育館に移動したのですが、そこでは各家族間が段ボール

の壁で区切られることにより、最低限のプライバシーが確保されるように改善されてきました。実際それだけで、先の児童が起すトラブルが、目立たなくなつたこともありました。避難所では、殆どの住民の方が、身近な方を津波で亡くされておられ、間に合わせの遺影が飾られているのをよく見かけました。一番お話を伺い辛かつたのは、奥様と愛娘三人を津波で失つてしまつた若いお父さんでした。奥様がまだ見つからず、昼間は捜索に行かれていつも不在のため、最終日の夕方ようやくお会いできました。私たちに

は殆どかける言葉も見つかりませんが、こみ上げる感情を抑えながらも(それは容易に見てとれました)、努めて穏やかに対応されていたのが印象的でした。最後になりましたが、今回の被災地支援をサポートしていただきました金沢大学神経科精神科の先生方、石川県神経科精神科医会、石川県障害保健福祉課、及び第九班として同行して下さいました県障害保健福祉課の岩尾さん、県こころの健康センターの島田さんと中宮さん、金沢市障害福祉課の鴻野さんに改めてこの場を借りて御礼申し上げます。

平成二十三年度の十全同窓会総会が去る七月二日(土)午前十時より医学部記念館において開催された。今回は九支部(沖繩、兵庫、奈良、京都、滋賀、三重、福井、静岡、東京)代表を含めて総勢六十名の参加があり、まず議長に佐藤保会長を選出し同会長の挨拶から始まりました。続いて五十名の物故会員に黙祷を捧げた後、加藤聖理事長より昨年度の会務報告並びに東日本大震災についての取り組み(お見舞金の支給)の報告が行なわれた。続いて医学系研究科長代理の大井章史理事が研究科報告をなされ、引き続き高安賞の贈呈式に移り最優秀賞王飛博士(血管分子生理学)、優秀賞の中野博博士(がん病態制御学)、田中千洋博

士(血管新生・結合組織代謝学)の表彰が行なわれた。次いで井関尚一医学部長より医学類報告が行なわれ次に、佐藤保会長により各支部代表の紹介があつた。その後議案審議に移り、大井章史会計理事から平成二十二年会計決算報告が、倉西久雄監事より監査報告があつた。引き続き大井理事より本年度の予算案の説明及び同窓会資金の管理、運用の説明がありいずれも了承された。次に役員改選が報告され正橋剛二監事の再任が了承された。次いで百五十周年記念事業について、井関尚一医学部長より、明年七月七日(土)十全講堂において記念式が挙行され、更に記念講演が行なわれることが報告された。その後、記念モニユ

メントの除幕式引き続き祝賀会が園遊会方式で行なわれることなどが話された。次に医学部学生の課外活動に対する支援金目録授与が佐藤保会長により行なわれた。その後特別講演・教授就任記念講演会が午前十一時より始まり最初に赤祖父一知先生(金沢社会保険病院名誉院長)の「彦三種痘所について」の特別講演が中村信一副会長の司会で始まり、教授就任記念講演は堀修教授(神経分子標的学 旧解剖学第三)の「小胞体におけるストレス制御と神経細胞死」の講演が古川副会長の司会で、次に尾崎紀之教授(機能解剖学 旧解剖学第二)の「動物モデルを用いた疼痛メカニズムの解明」の講演が小森貴副会長の司会で行なわれ、金沢大学発祥の地発見の経緯や最新の研究成果を出席者一同熱心に聞き入り、時を忘れる程であつた。

講演終了後、懇親会が開かれ、佐藤保会長の挨拶があり、次いで御来賓の山崎光悦金沢工業会会長・理工学研究域長の発声による乾杯の後、各支部代表による



(加藤 聖 記)

教授 就任 挨拶

川尻 秀一博士 (II会員)

細胞浸潤学 (歯科口腔外科学) 教授に就任



この度、平成二十三年八月一日付を持ちまして、金沢大学医薬保健研究域医学

系細胞浸潤学 (歯科口腔外科学) 教授に就任させていただきました。歯科は金沢大学附属病院に昭和二十一年五月に診療科として設置され、歯科口腔外科としては昭和四十八年十月に認可されました。初代教授は玉井

健三先生で昭和五十二年一月に就任、第二代教授は山本悦秀先生で昭和六十三年八月に就任されています。私が第三代目の教授となりますが当科の歴史は発足からすでに六十五年以上にもなっており、その責任の重さに身が引き締まる思いです。

これまで、当教室では口腔癌、口腔感染症、顎関節症、顎変形症を中心に臨床と研究を行ってきました。さらに近年では、ドライマウスや歯科インプラントなど時代のニーズに合わせた治療も行っています。今後とも地域

の医療機関や患者さんの要望に十分応えられるような質の高い医療を提供していきたいと思っております。また、金沢大学は優秀な医師、研究者、教育者の育成を担っています。さらに当教室では、北陸には歯科大学がない関係で、歯科医師を育成する責務も負っています。地域の医療の発展のため、また世界の医学の発展のため、これからも臨床、研究、教育に、精一杯力を注いでいきたいと思っております。

伝統ある金沢大学で教授職として従事させていただけること大変感謝しております。金沢大学の益々の発展に向けて邁進する所存ですので、今後とも十全同窓会の諸先生方のご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

上田 善道博士

(昭和五十六年卒業)

金沢医科大学病理学II部門教授に就任



平成二十三年七月一日付をもちまして、金沢医科大学病理学II (病理病態学) 部門教授を拝命いたしました。

これまで、昭和五十六年に金沢大学医学部を卒業後、天理よろづ相談所病院と米國フィラデルフィア大学病院での臨床と外科病理の研究の後、第二病理学の大学院生として中西功夫教授のもと、岡田保典現慶応大学教授をはじめ多くの先生方のご指導をいただき研究

生活をスタートしました。土屋弘行現整形外科学教授とは大学院生時代から一貫して、また、平成二年から二年間留学いたしました独ミュンスター大学ロスナー教授とも現在に至るまで骨軟部腫瘍に関する共同研究を継続させていただいております。留学後、天理よろづ相談所病院で第一戦の外科病理医として勤務の後、平成六年、勝田省吾教授 (現金沢医科大学学長) からお誘いを受け金沢医科大学に助教として赴任し、この度、病理学II部門教授に就任する機会に恵まれました。

金沢医科大学の使命である「良き臨床医の育成」、特に研究マインドの醸成に重点を置くと共に、北陸地方における病理医の養成・供給も教室の重要な任務と考えています。本同窓会の先生方にはこれまで通りご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

近藤 峰生博士

(平成三年卒業)

三重大学眼科学教授に就任



平成二十三年八月一日付で三重大学大学院医学系研究科神経感覚医学講座眼科学の教授を拝命いたしましたので、十全同窓会の皆様にご挨拶申し上げます。

私は平成三年に金沢大学医学部を卒業後、公立陶生病院で一年間の初期研修を行い、平成四年に名古屋大学眼科学教室に入局いたしました。入局後は網膜硝子体グループに属して難治性の網膜硝子体疾患の診断と手

春の叙勲

瑞宝小綬章

飯田 恭子 (昭和三十八年卒業)

旭日双光章

山崎 幹雄 (昭和三十五年卒業)

瑞宝双光章

野尻 功 (昭和三十二年卒業)

術治療に従事し、夜中や休日の緊急手術も多く執りしてきました。診療と併行して平成五年より大学院に入学し、三宅養三教授の御指導のもと視覚電気生理の研究を開始しました。平成十一年からは米國ミシガン大学に留学し、Stevenson教授の指導のもとに眼疾患動物モデルの視機能解析を学びました。帰国後も眼疾患の視機能解析の研究を続け、平成二十年に日本眼科学会で評議員会指名講演の機会を賜り、日本医師会研究助成もいただきました。帰国後の臨床および基礎研究に関しては、名古屋大学眼科の寺崎浩子教授に熱心な御指導をいただいたことを心より感謝しております。今後は三重大学および三重県の眼科医療の発展に向けて精一杯努力していく所存です。今後ともどうか御指導の程よろしくお願ひ申し上げます。

総会記事

平成二十二年 度決算報告ならびに  
平成二十三年 度予算について

平成二十二年 度決算

表一に一般会計の決算書を示します。  
会費収入は予算にわずかに及びませんでした。雑収入ではDVD頒布に係る分配金が継続した収入となつています。

支出では、事業費が少々減額となりました。会報の製本の延期、ホームページの公開の遅延による予算の執行が無かつたことが主な理由です。

補助費は、支出が減額しております。名簿作成費は、従来通り特別会計で決算することとしました。予備費からは非常勤職員への給与を支出していません。

付随する特別会計では、十全同窓会基金会計からは、昨年の理事会で承認されたキンストレッキー展示用ケース代金を支出しました。名簿作成会計では、免除会員の先生方からの賛助が大きな収入となつています。高柳奨学金会計は、平成二十一年度は奨学生三名に対して平成二十二年一〜三月分を、平成二十二年は奨学生二名に対して平成二十三年四〜十二月分支給しました(表二〜五参照)。

以上の決算報告に対して監査理事から会計監査報告がなされ承認されました。

平成二十三年 度予算  
表六をご覧ください。会費収入は例年とほぼ同額を見込みました。金沢医科大学時代のDVDの購入希望があるため、雑収入を期待しました。

支出では、前年度並としましたが、十全同窓会ホームページの完成、ホームページの情報更新用プログラムの整備の

予算を計上しました。会報一五〇号発行記念座談会の開催費用は会議費より支出、招待旅費は予備費で賄います。また、東日本大震災見舞い金、会報デジタル化にかかる費用は予備費から支出します。(会計担当 大井章史記)

会計監査報告書

平成22年度 金沢大学医学部創立2・3百年祭小泉基金

上記会計科目報告の収入および支出に關し、帳簿および証拠書類に間違いなく、現在高についても相違ないことを確認した。

平成22年 2月15日

監事 中尾真二 (印)  
監事 倉白久雄 (印)  
監事 正橋剛一 (印)

会計監査報告書

平成22年度 金沢大学医学部十全同窓会会計

金沢大学医学部十全同窓会基金会計  
十全同窓会会員名簿作成会計  
高柳奨学金会計  
金沢大学医学部史会計

上記会計科目報告の収入および支出に關し、帳簿および証拠書類に間違いなく、現在高についても相違ないことを確認した。

平成22年 2月15日

監事 中尾真二 (印)  
監事 倉白久雄 (印)  
監事 正橋剛一 (印)

(表1) 平成22年度決算書

自 平成22年 1月 1日  
至 平成22年12月31日

科目	収 入			科目	支 出		
	予算 (円)	決算 (円)	摘要 (円)		予算 (円)	決算 (円)	摘要 (円)
前年度繰越金	2,526,707	2,526,707		事業費	6,334,428	5,326,017	会報印刷製本・封筒代 2,573,130 ア kansas印刷代 29,100 会報・ア kansas発送代 1,467,459 関連病院長会議・関連病院渉外費 200,000 卒前研修支援 (SP研修会支援) 200,000 学生課外活動支援 (西医体) 300,000 (立山診療班) 100,000 (白山診療班) 100,000 会費払込用紙印刷代 39,900 新入会員卒業祝 (印鑑付ペン) 274,428 会報製本代 No.101 ~ No.116 各2冊 42,000
会費収入	12,872,000	12,764,040	平成22年度会費 4,000円×1473人 5,892,000 過年度分609人 5,904,040 平成22年度以降会費 412,000 準会員会費 6,000円×90人 540,000 4,000円×4人 16,000 預金利息 974	旅費	1,000,000	998,460	十全同窓会ホームページ制作 0 各支部総会への出張費 528,720 各県支部長総会招待旅費 439,240 理事会出席、監査等の来学旅費 30,500 総会、理事会、会報編集委員会、名簿編集委員会 287,651
雑収入	138,860	226,738	H22年 SP研修会 支援金からの返金 81,980 DVD頒布に係る分配金 (KUTLOより) 142,784 郵送料 (会員から) 1,000	会議費	330,000	287,651	
				慶弔費	100,000	5,800	
				補助費	750,000	529,040	弔電 (10件) 5,800 記念館展示室整備 0 図書館医学部分館整備補助 299,040 学生課外活動補助 (ACLS) 50,000 医学展補助 100,000 Live Aid Kanazawa 60,000 「大学院医学系研究科」進学説明会補助金 20,000
				事務費	2,750,000	2,740,778	ホームカミングダイ開催負担金 0 会費払込料、プリンター修理・感光体・トナー、通信費、証明書発行手数料、文具、振込手数料 490,778 人件費 2250,000 会報袋詰め作業代 60,000 11件 430,000 十全同窓会基金口座へ 2,000,000 アルバイト、超過勤務、その他 733,838
				雑費	60,000	60,000	
				支部への補助費	500,000	430,000	
				基金への繰込み	2,000,000	2,000,000	
				予備費	1,713,139	733,838	
				繰越金		2,405,901	
計	¥15,537,567	¥15,517,485		計	¥15,537,567	¥15,517,485	

(表2) 十全同窓会基金会計報告書

自 平成22年 1月 1日  
至 平成22年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	140,281,231		150周年記念事業	4,935,000	奨学寄附金(キンストレーキ展示用ケース 寄附)
繰 入 金	2,000,000	一般会計(十全同窓会普通預金)から	外国債券・清算金	1,192,639	ユーロ円債(GEキャピタルコーポレーション) *額面 100,000,000 購入 *単価 101.1 *経過利子額 92,639
利 息	580,000	GEキャピタルコーポレーション利金			
	1,370	北國銀行普通預金利息			
	4,032	北陸銀行大口定期預金利息			
	15,334	北陸銀行普通預金利息			
	436,897	ゆうちょ銀行定期解約利息			
計	143,318,864		計	6,127,639	残高 ¥137,191,225

(表3) 十全同窓会会員名簿作成会計報告書

自 平成22年 1月 1日  
至 平成22年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
繰 越 金	5,162,310		事 務 費	20,325	払込手数料
協 賛 金	775,000	免除会員協力@5,000×183件	通 信 費	1,762,649	名簿送送料、名簿学年担当調査費
広 告 料	3,171,000	福田商店より	会 議 費	40,660	反省会補助
雑 取 入	520	普通預金利息	名 簿 作 成 費	4,996,425	H21版名簿、訂正①(2回分)
計	9,108,830		計	6,820,059	残高 ¥2,288,771

(表4) 高柳奨学会計報告書

自 平成22年 1月 1日  
至 平成22年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	7,456,335		奨 学 金	225,000	H21年度 奨学生3名 (25,000円/1ヶ月) 平成22年1月～平成22年3月分
利 息	1,749	普通預金利息		450,000	H22年度 奨学生2名 (25,000円/1ヶ月) 平成22年4月～平成22年12月分
計	7,458,084		計	675,000	残高 ¥6,783,084

(表5) 金沢大学医学部史会計報告書

自 平成22年 1月 1日  
至 平成22年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	3,317,042		—	0	
利 息	770	普通預金利息			
雑 取 入	0				
計	3,317,812		計	0	残高 ¥3,317,812

(表6) 平成23年度予算書(案)

自 平成23年 1月 1日  
至 平成23年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	2,405,901		事 業 費	6,358,288	会報・特別号 印刷製本代・テープ起こし代 3,000,000
会 費 取 入	12,492,000	23年度会費 4,000円×1600人 6,400,000 過年度分 5,000,000 平成23年度以降会費 400,000 準会員会費 6,000円×112人 672,000 4000円×5人 20,000	旅 費	1,000,000	会報・アカンサス発送代 1,800,000 会費払込用紙印刷代 50,000 アカンサス印刷代 50,000 関連病院長会議・関連病院渉外費 200,000 卒前研修支援 (SP 研修会支援) 200,000 学生課外活動支援 (西医体) 100,000 (立山診療班) 100,000 (白山診療班) 100,000 新入会員卒業祝 (印鑑付ペン) @ 2,772×104本 288,288 十全同窓会ホームページ制作 230,000 ホームページ「会員情報変更受付」サイト修正 60,000 ホームページ形式変更プログラム一式 150,000 ホームページメンテナンス (2回/年) 30,000 各支部総会への出張費、各県支部長総会 招待旅費、 会報取材旅費 総会、理事会、編集委員会、座談会 450,000 香典・弔電等 100,000 記念館展示室整備 200,000 図書館医学部分館整備補助 300,000 学生課外活動補助 (ACLS) 50,000 Live-Aid Kanazawa 70,000 医学展 100,000 「大学院医学系研究科」進学説明会補助金 20,000 ホームカミングタイ開催負担金 20,000
雑 取 入	89,240	DVDに係る分配金 89,240	会 議 費	450,000	払込料金、プリンター修理・感光体・トナー、通信費証明 書発行手数料、文具、振込手数料、超過勤務 1,000,000 人件費 2,350,000 会報袋詰め作業代 (年3回分) 60,000
計	¥14,987,141		補 助 費	760,000	座談会開催費、招待旅費、会報デジタルアーカイブ化、 東日本大震災見舞金 その他
			事 務 費	3,350,000	
			雑 支 予 備 費	60,000	
			支 部 基 金 へ の 繰 込 み	500,000	
			予 備 費	0	
			計	¥14,987,141	



# 彦三種痘所について

金沢社会保険病院名誉院長 赤祖父 一知

平成二十四年金沢大学医学部は創立五十周年を迎える。今日まで明らかにされていなかった本学の淵源とされている「彦三種痘所」について、その跡地を特定するよう五十周年記念誌編纂委員長の山本博教授から依頼された。そこで、平成二十一年夏から約一年間その調査にあたり、平成二十二年開催の第三十二回北陸医史学会総会で結果を報告し、会員諸氏の諒承を得た（『北陸医史』第三十三号二十八～三十五頁 平成二十三年二月二十五日）。

今総会の特別講演では、まずその場所推定までの経過を述べ、次いで本学の起源を文久二年（一八六二）設立の彦三種痘所とした根拠について再考し報告した。しかし本稿では、紙面の都合上「彦三種痘所の推定所在地について」のみ報告する。

まず彦三種痘所についての今回の調査にあたり、これに関する史料の検索から始めた。その結果、幕末明治前期における彦三種痘所関連の一次史料（原史料）は存在しないようであり、明治三十六年（一九〇三）九月二十二日に、「金沢市沿革史」編纂のための材料として金沢病院長兼金沢医学専門学校校長 高安右人教授から渡瀬政禮金沢市長に提出された『石川縣金澤病院沿革』（寺畑喜朔編・複製、原本同博士所蔵）の記述が種痘所関連の最も古い史料であることが分かった。

一次史料が存在しないので、まず金沢市立玉川図書館・近世史料館所蔵の幕末各時期の「金沢城下絵図」や「町絵図」の中に種痘所を見めることからはじめた。しかし、そのような箇所は認められなかった。ただ弘化嘉永期『金府大繪圖』（文久時代金澤完）の中に、彦三八番丁南端に近接する本町常福寺上地町に武士邸でない「検校ヤシキ」と記してある箇所が目玉された。この検校屋敷は文化八年（一八一八）の『金澤町繪圖』からみて、浅井検校の屋敷跡地と考えられた。

次いで、文久年間の彦三八番丁在住者を『加賀藩組分侍帳』全（文久年間加賀藩直接関連直臣交名）を中心に検索したが、ここでも種痘所に関係するような人物を見付けることができなかった。そこで、当時の牛痘種痘法が善感した子供の腕から複数の子供へほぼ一週間の間隔で植え継いでいく方法であったことから、種痘所は武家地でなく、道路の幅も比較的広く、人の往来が割合自由に行き来できる町地に設置されるのが至当と考えた。

このような観点から、その設置条件に合致する場所を本来の武家地である彦三八番丁内のみならず、その近接地を含めて探求することにした。彦三八番丁区域の時代的変遷と地区内の武家屋敷の入れ替りを知るために『屋敷打渡繪圖』（寛政七年～慶応二年）を調査した。

図1は、彦三八番丁南端部に相当する地域の屋敷打渡状況をまとめたものである。図に示すごとく、既述の常福寺上地町の浅井検校の旧邸にほぼ相当する場所が、十間町組合本町地家作買居として、元治元年（一八六四）三月十六日の日付で彦三八番丁に組み入れられ、御算用者小頭室田喜左衛門（知行高百石）に移り、本町地から武家地となっているのが認められた。

元治元年（一八六四）に種痘所が南町に移り「金沢種痘所」となっていることから、この地に種痘所が置かれた可能性が最も大きいと推察された。種痘所として利用された反求舎なる建物については不詳であったが、多分この地内であった十間町組合の建物の一部を指すのではと考えられた。

以上の点から、「彦三」とはいえ、元治時代に入り彦三八番丁に併合された本町の常福寺上地町にあった十間町組合本町地（元浅井検校屋敷）の家作に今日われわれが云っている「彦三種痘所」が置かれたものと推定された。この地は現在の安江町一番

三十、三十一号のミリオンビル、金沢彦三郵便局と一部袋町にかかる所である。したがって、これまで種痘所跡地候補として示唆されていた彦三二丁目明治安田生命第二ビルの地は侍地であり、今回の調査で否定された。なお常福寺上地町は、明治五年（一八七二）にすべて彦三八番丁に併合されたことである。今回の調査と推定に基づき、今秋金沢市安江町の彦三郵便局前に「彦三種痘所跡地」の記念碑が金沢大学によって建立されることになっている。

なお今後彦三種痘所設置場所に直接結びつく一次史料が発見され、今回の推定地と異なるものであった場合には、喜んでそれに譲りたいと考えている。

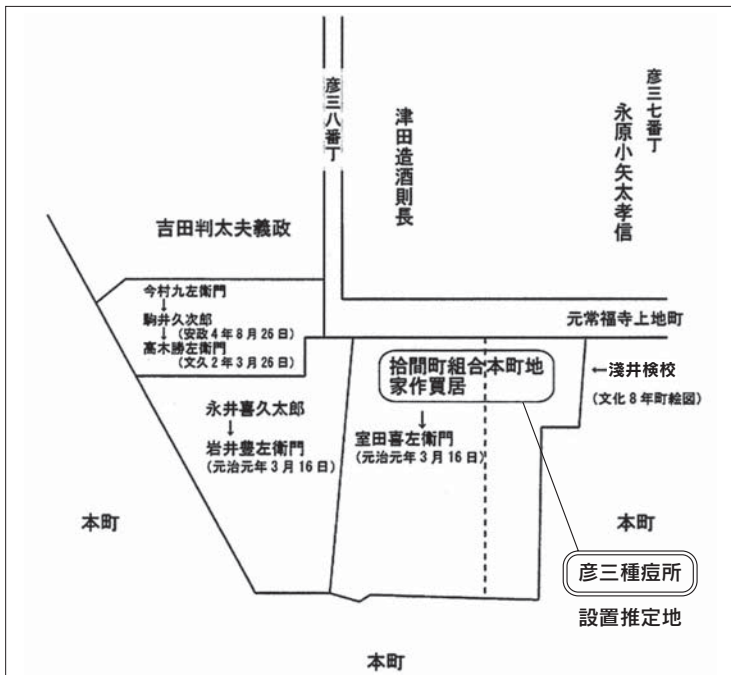


図1 彦三八番丁南端部の「屋敷打渡」の変遷  
近世史料館所蔵「屋敷打渡繪圖」より複製

# 小胞体におけるストレス制御と神経細胞死

神経分子標的学 (旧解剖学第三) 教授 堀 修

細胞内小器官のうち、ミトコンドリアの障害は、酸化ストレスを上昇させ、神経細胞死を誘導することが以前から言われており、近年、小胞体の障害も、小胞体ストレスと呼ばれる細胞内ストレスを上昇させ、神経細胞死を引き起こすことが分かって参りました。私たちは、脳虚血における病態を解析する過程で、この小胞体ストレスに対する細胞応答(unfolded protein response (UPR))が神経細胞やグリア細胞の生存や機能に重要な働きをしていることを見出しました。

小胞体は、カルシウム恒常性の維持、脂質の代謝、そして分泌系蛋白質の生合成等を行う小器官であります。細胞内でエネルギー不足(低酸素・虚血)、カルシウム恒常性の破綻、蛋白質の修飾異常、細胞内輸送の低下等が生じると、小胞体内に未熟な分泌系蛋白質が蓄積し、小胞体ストレスと呼ばれる状態に陥ります。しかしこの時、細胞はUPRと呼ばれる細胞内シグナルを活性化し、小胞体ストレスから細胞を救済しようと務めます(図1)。すなわち、(一)蛋白質合成を抑制して小胞体に入流する蛋白質量を低下させることで、小胞体の負担を軽減します。(二)小胞体内の分子シャペロンや酸化還元伝子の発現を増加させ、小胞体環境を改善します。(三)蛋白質分解系(ユビキチン・プロテアソーム系)に属する遺伝子の発現を増加させ、小胞体内に蓄積した蛋白質を除去します。私たちは新規小胞体分子シャペロンORP150のトランスジェニックマウス、ノックアウトマウスを作製して個体レベルでの解析

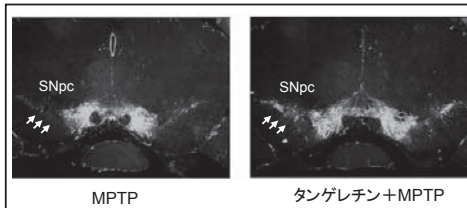
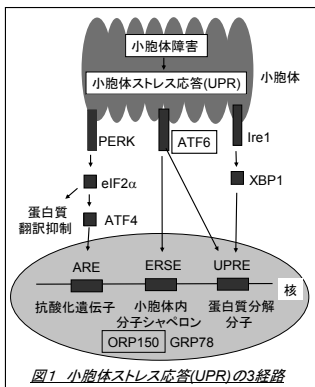
を行いました。その結果、ORP150を神経細胞に強制発現させたトランスジェニックマウスは、野生型マウスに比べて脳虚血に対して抵抗性を示すことが明らかになりました。同様のORP150の細胞保護効果は、脳虚血以外にもマウスパーキンソン病モデルにおいても認められました。その後、ORP150の上流に位置するUPRの主幹(マスター)転写因子ATF6のノックアウトマウスを用いて上記脳梗塞モデルやパーキンソン病モデルを作製したところ、ATF6は神経保護作用を有することが明らかになりました。つまり、UPRの活性化は神経細胞の生存に重要な役割を果たしている可能性が強く示唆されたわけでありです。

そこで私たちは、UPRを活性化する化合物が新たな神経保護薬開発の標的になるのではないかと考え、小胞体ストレスを制御する物質の探索を行いました。この探索系の特徴は、小胞体ストレスに対して特に感受性が強いE9.Ep9欠損細胞と言う細胞を用いている点です。この細胞は、野生型の細胞に比べて、ツニカマイシンなどの小胞体ストレス誘導剤により再現性よく細胞死が誘導されます。さらに、E9.Herp.KO細胞には以下のような特徴もあり、大量の化合物から小胞体保護物質をスクリーニングするのに適していると考えられました。すなわち、①通常の培養条件下(非ストレス条件下)では安定した増殖を示し、アッセイに必要な数の細胞を短時間で準備出来ます。②Herp.KO細胞を短時間でクロン化しているため、

ストレスに対する細胞応答が個々の細胞間でほぼそろっており、細胞死などの判定が容易であります。③ES細胞と異なり、細胞の扱いが容易であります。私たちは、このE9.Herp.KO細胞の他、ヒト神経芽細胞腫のE9.C57BL細胞、ラットPC12細胞等、小胞体ストレスに感受性を示す細胞株を用いて、小胞体ストレスから細胞を保護する化合物の探索を行いました。その結果、メトキシフラボン(一種、タンゲレチンに強い小胞体ストレス由来細胞死抑制効果が存在することを発見いたしました)。

メトキシフラボンは柑橘類の果皮に多く含まれ、これまでに、腫瘍転移抑制効果、腫瘍細胞増殖抑制効果、コレステロール低下作用、動脈硬化抑制作用、抗真菌作用、抗肝炎ウイルス作用、神経保護作用、抗炎症作用、メラニン減少作用、紫外線保護作用など、多彩な生理活性が報告されており、メトキシフラボンは不明でありました。私たちは、タンゲレチンやノビレチン等のメトキシフラボンが、培養細胞のみならず、マウスにおいても、ツニカマイシン投与により引き起こされる小胞体ストレス由来細胞死を、ほぼ完全に抑制する事を発見いたしました。その後のメカニズム解析より、メトキシフラボンはUPRの

一経路であるPERK-eIF2αを緩徐に活性化して、小胞体ストレスに対する防御系を高めていることが判明しました。更に私たちは、このメトキシフラボンが持つ上記神経保護作用と小胞体ストレス制御との関連性について、パーキンソン病モデル薬剤MPTPをマウスに投与する系を用いて検討致しました。その結果、MPTP投与により引き起こされる黒質緻密層でのドーパミン作動性神経の変性は、タンゲレチン前投与により改善し(図2)、その程度はUPRの標的遺伝子であるGRP78の発現上昇と関連している事が判明致しました。これらのことより、メトキシフラボンの神経保護作用の少なくとも一部は、神経細胞のUPRを強化することにより、細胞内ストレスが制御されたためである可能性が示唆されました。今後、UPR3経路の特異性や他の細胞内ストレスとの関連性についてより詳細な解析を行い、UPRを利用した新たな神経保護薬の開発を目指したいと考えております。何とぞ、ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。



Vehicle (左) 又はタンゲレチン(20mg/kg) (右) を3日間経口投与し、その後、MPTP (20mg/kgx4回/day)を腹腔内投与した。4日後の黒質緻密層(SNpc)における神経変性の程度を、抗TH抗体を用いた免疫染色により評価した。

# 動物モデルを用いた疼痛メカニズムの解明

## 機能解剖学 (旧解剖学第二) 教授 尾崎 紀之

### 内臓の痛み

痛みは重要な警告系ですが、強い痛みや慢性痛は私たちを苦しめます。我々はメカニズムに基づいた痛みのコントロールをめざし研究を進めてきました。痛みの中でも内臓の痛みは、私たちが医療機関を受診する大きな理由ですが、内臓はからだの内部にあつてアプローチが難しいこと、皮膚とは異なり、組織の損傷が必ずしも痛みを引き起こさず、痛みを起こす「適刺激」が皮膚のものとは異なること、などから皮膚の痛みに比べて、その研究が立ち遅れていました。また、欧米ではクローン病や潰瘍性大腸炎に代表される炎症性腸疾患、結腸癌や過敏性腸症候群など結腸の疾患の頻度が高く内臓痛をきたす疾患として重要なため、結腸、直腸の研究が内臓痛の先行研究として進んでいましたが、日本人にとって馴染み深い胃の痛みについては大きく立ち遅れていました。そこで、私は、身近な内臓である胃の痛みの解明に取り組んできました。

### 胃の知覚神経が痛みを受容するメカニズム

胃の痛みを受容する基礎的なメカニズムを明らかにするために、バルーン伸展による定量性再現性のある胃の痛みの動物モデルを開発し、迷走神経と大内臓神経に含まれる胃の知覚神経の性質を電気生理学的に調べました。その結果、バルーン伸展による急性の胃の痛みを受容には大内臓神経に含まれる知覚神経が関与しており、大内臓神経には痛みの受容に重要と思われる高閾

値機械受容器が含まれることがわかりました。胃の知覚神経終末が機械刺激を受容する分子メカニズムはよくわかっていませんが、兵庫医大の野口光一先生のグループの研究に関わる機会を得、末梢の知覚神経でのMAPキナーゼのリン酸化が関与していることが明らかとなりました。

### 胃の疾患に伴う痛みのメカニズム (図)

胃の疾患に伴う痛みのメカニズムを明らかにするために、実験的な潰瘍や炎症を作成しそれに伴う痛みを解析しました。潰瘍や炎症による胃の痛みには、電位依存性ナトリウムチャネルの興奮性の亢進を介した、神経成長因子(NGF)による胃の知覚神経の感作が重要であることを見出ししました。また、近年は、痛みなど症状を呈するものの明らかな病変の無い機能性の消化管疾患が注目され、機能性胃腸症(FD)や過敏性腸症候群(IBS)が問題になっていきます。ラットにストレスを加えると腸に痛覚過敏が起こり、IBSのモデルとして提唱され、ストレスによって放出された副腎皮質刺激ホルモン放出因子(CRF)による結腸の運動や痛覚の異常が関与していると考えられています。そこで私たちはストレスが胃の痛覚に及ぼす影響を調べ、FDのモデル動物の作成を試み、その痛覚過敏におけるCRFの関与を調べました。その結果、適度な強度のストレスは胃に組織学的な病変を起こさないものの胃の痛覚を亢進させ、しかも、CRF拮抗薬はストレス後の亢進

した胃の痛みを抑制しました。ストレスモデルは機能性胃腸症の解析に有用で、ストレスでみられた胃の痛覚過敏にはCRFが関与し、機能性胃腸症のメカニズムとして重要と思われる。

### 痛みを受容伝達する基礎的メカニズム

さまざまなバックグラウンドをもつ共同研究者と研究することで、それぞれの分野での痛みの研究に取り組み機会を得ました。顎関節症、三叉神経因性疼痛、癌性疼痛、薬剤性神経因性疼痛、筋痛、骨折痛について新しい動物モデルを開発し、それらの痛みには一次知覚神経における痛みの受容に関わるイオンチャネルの発現亢進や神経成長因子が関与していることを明らかにしてきました。堀紀代助教は、抗がん剤シスプラチンによる神経因性疼痛には、ATPの受容体であるP2X<sub>3</sub>や酸受容体TRPA1の発現の亢進が関わっていることを明らかにし、最近では末梢動脈疾患に伴う疼痛モデルの開発に成功し、それに関わるイオンチャネルの関与を調べています。また、山口豪助教は、これまで彼が行ってきた心臓刺激伝導系の形態学的解析の研究で培ってきた知識と技術を活かしながら、虚血性心疾患の痛みの研究に取り組んでいます。林功栄研究員は、これまでほとんどメカニズムのわかっていなかった筋筋膜性疼痛症候群の痛みの解明に取り組む、持続性の筋痛動物モデルの作成に成功し、筋の変性・再生に伴う神経成長因子の発現が持続性の筋痛の発現に関わっていることを明らかにし、現在は、脊髄マイクログリアの活性化の関与を解明しています。

### 腹部内臓の自律神経分布の立体構築

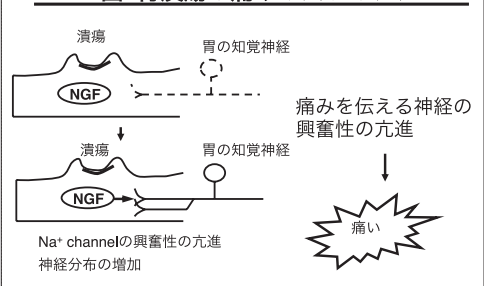
内臓の神経分布は、内臓の機能や疾患に伴う症状、悪性腫瘍の神経周囲浸潤様式に

関連し臨床向きわめて重要です。易動准教授は、私の前任の田中重徳教授とともに、実験動物スニクスを用い、内臓の支配神経を全載標本による免疫組織化学法で三次元的に観察することに成功し、これを用いて腹部内臓の神経分布の立体構築を明らかにしています。また実験動物スニクスには内臓脂肪がほとんどないことに着目し、肥満予防の基礎研究に取り組んでいます。

### 内臓の痛みから筋骨格系を含めた深部組織の痛みのメカニズムの解析へ

近年の分子生物学の発展により、皮膚の痛覚神経の興奮やその変化に関与する分子が急速に解明されつつあります。それに伴い、これら分子の関連伝子やその産物を標的とした新しい痛みの治療法が提唱されています。しかし筋骨格系や内臓など深部組織の痛みの研究は、現状では皮膚の痛みの知見の後追いの感が否めません。今後は皮膚での知見を踏まえつつ、皮膚とは異なつた特徴のある筋骨格系や内臓を中心とした深部組織の痛みのメカニズムを明らかにしたいと考えています。また、深部組織に関わらず、さまざま

図 胃潰瘍の痛みのメカニズム





# 金沢大学学友会設立の意義を考える

金沢大学副学長 古川 仞

東日本大震災以来、我が国が直面している厳しい困難な状況を克服して、安全かつ安心な社会を構築するために、また持続的発展を実現するために今、国立大学に求められているものは国立大学の機能強化である。国立大学は、国民に対してナショナルセンターとしての機能、リージョナルセンターとしての機能を強化し推進していく義務がある。このためには、大学の使命である卓越した教育の実現と人材育成、学術研究を強力に推進しなければならぬ。また、地域振興のための中核拠点となること、積極的な国際協力と国際貢献活動を推進していくことなどを国民に約束しなければならぬ。このように国立大学に課せられた公共的な役割は大きく問題が山積する状況において、金沢大学学友会（学友会）が創立される意義について考えてみたい。

## 学友会設立の目的

金沢大学は、平成二十四年五月三十日創基百五十年を迎えるが、この期をとりえ本年十一月五日の第五回ホームカミングデーにおいて学友会を設立することになった。学友会の用語は主に学生に関する活動を行う団体や、学生だった者に関する活動を行う団体に対する名称である。しかしそれには具体的な活動範囲や組織の運営方法などについて典型的な類型がない。各団体がそれぞれの事情にあわせ

て活動範囲や組織の運営方法を決めているのが一般的である。金沢大学学友会は会員と大学とのコミュニケーションを促進し、大学支援の環境を醸成するとともに、会員相互の親睦と協力を図ることを目的としている。金沢大学はこれまでやや希薄であった卒業生と金沢大学との連絡を緊密化し、全国に散らばる会員相互の交流と親睦を推進することにより大学の機能強化を一層加速することを意図している。このような考えは他大学における類似組織の設立においても同様と見受けられる。その背景には、国立大学法人化以降、毎年大学運営費交付金が減少するだけでなく、第二期中期計画期間中の交付金に関する仕組みが確立されていない現状があることを特記したい。

## 学友会と同窓会の関係について

イメージとしては、従来から存在する基幹同窓会（法経文学部同窓会、教育同窓会、理学部同窓会連絡会（各学科同窓会）、医学部十全同窓会、保健学科つるま同窓会、薬学同窓会、金沢工業会、四高同窓会）を中核とし、金沢大学とのパートナーシップの概念の下、会員をゆるやかに束ねる組織と考えられる。その意味で学友会は決して同窓会の一本化ではなく、基幹同窓会がゆるやかに連合した組織と理解できる。したがって、学友会が設立されても学部・学科の同窓会は

これまで同様、「基幹同窓会」構成員として独自の活動を継続することに関しては全く問題ない。むしろ卒業生としてのidentityを確立した上で、さらに基幹同窓会間の交流と連携を育むことが求められる。

学友会の構成は、卒業生・修了生・在学生・教職員の個人会員ばかりでなく、学友会に加盟登録する同窓会（登録同窓会という）から成る。それらは、例えばサークル・同好会等の同窓会、学年会・同期会・クラス会、学科・教室・研究室、ゼミ等の同窓会、学寮同窓会、地区（域）、職域、海外の同窓会又は卒業生ネットワーク等多種考えられる。学生保護者からなる後援会等も登録同窓会として参画できる点は、本学の大きな特徴であろう。より多くの個人・団体が参加することが、金沢大学との絆を大切にし、金沢大学コミュニケーションを育てていく強靱な力になると考えられる。

## 学友会の役割

学友会の登録同窓会が多ければ多いほど、同窓生間の親睦・懇親、母校・後輩への後援などが活性化され、母校に対して、卒業生の総意を示す団体として、強い影響力を持つことが推測できる。先に大学の機能強化について述べたが、機能強化の方策として大学情報の積極的な開示が求められる。特にステークホルダーの特性に応じた大学発信体制の充実を図ることが必要である。このため本学では学生に対しては、「アカンサスポータル」を利用して、学習支援等の情報を発信している。保護者に対しては、年に一回で送付している。同窓生に対しては、基幹

同窓会からの定期的な同窓会誌のほか、「学友支援ニュース・レター」等を送付し、本学の活動状況等を発信している。学友会が発足した暁には各ステークホルダーに対して今までの以上の情報発信が要求されることも推測される。また、ステークホルダーとの共同活動によって大学機能の理解が促進されることを考えると、今後そのような事業をさらに活性化していく必要もある。このことは、大学の発展に欠かせない社会貢献を積極的に推進することにもつながる重要課題と捉える。

先に、大学運営費交付金の仕組みに関する問題点を指摘したが、大学機能強化のためには大学運営の効率化・高度化を推進するとともに、多様な資金の獲得と有効活用を図らねばならない。学生の修学支援、研究支援、地域貢献活動への支援を図るために平成二十年度に創設された「金沢大学基金」は今年六月、寄付申込累計が一億円を超えた。昨年からの運用益が留学生支援に使用され、今年度からは、一億円を超える基金の一部を学生支援にも使用される。したがって、今後本基金は大学の個性・特色の明確化を図るためにも貴重な財源となる。学友会への期待は大きい反面、大学も不断の改革を推進していかねばならない。

## 学友会の通称（愛称）について

最後に学友会名称について現在、「石川門学友会」、「燦燈会」（金沢大学歌「燦たる燈をかかげたり」から）、「北の都学友会」、「金大北都会」など様々な御提案を頂いている。しかし、愛称の制定は急ぐ必要はない。自然発生的な機運を待ちたい。

## 受賞

## 「平成二十三年度 文部科学大臣表彰

## 科学技術賞(研究部門)受賞」

〔がん腫制御研究所 遺伝子・染色体構築研究野教授

平尾 敦

この度、「幹細胞自己複製制御機構の研究」で、文部科学大臣表彰科学技術賞を受賞いたしました。私は、組織幹細胞とがんの研究を行っております。組織幹細胞とは、各組織を構成する体細胞の源の細胞であり、分化能とともに自身を再び作る自己複製能を兼ね備えた細胞です。この幹細胞自己複製能を適切に制御することは、個体の一生に亘る組織恒常性の維持に必須であり、その制御メカニズムを理解することは、再生医療技術やがん治療法の開発につながる重要な研究課題だと考えています。今回の受賞の対象となった研究では、造血幹細胞の自己複製制御システムが、細胞の老化や寿命を制御する因子によって支えられていること、また、幹細胞維持に必須の分子が、白血病では治療抵抗性の原因となっていることを明らかにしました。これらの研究をさらに推進し、がんの病態解明や新たながん治療の標的分子の探索に取り組み、今後、人の健康維持増進に貢献できるような研究に発展させたいと思っております。一連の研究は、本学がん進展制御研究所で行ったものであり、支援いただいた大学、研究所の関係の皆様、そして研究室のメンバーに心より感謝いたします。

## 平成二十二年度(第七回)

## 金沢大学十全医学賞

金沢大学医薬保健研究域 医学系  
脳・脊髄機能制御学(脳神経外科)

中田 光俊(平成六年卒業)

この度、栄誉ある第七回十全医学賞を受賞させていただきました。研究テーマは「悪性脳腫瘍の浸潤機構に関する基礎的・臨床的研究」です。根治不能の悪性グリオーマに対する新規治療法の確立は医学上の重要課題です。本研究は平成九年にがん研究所岡田保典教授(現慶義塾大学病理学)のご指導の下、学位研究として着手した「細胞外基質分解酵素と脳腫瘍浸潤」から始まりました。学位取得と並行してがん研究所佐藤博教授からは「細胞外微小環境と浸潤」に関する研究をご指導いただき、学位取得後四年半にわたる米国留学時には「浸潤腫瘍細胞の膜型蛋白とシグナル」に発展しました。現在は、がん研究所源利成教授のご指導の下、悪性脳腫瘍の浸潤亢進分子であるGSK3β(グリコゲンシンターゼキナーゼ3β)を標的とした臨床試験をトランスレイショナルリサーチとして実施しております。これまで一貫した研究テーマを継続できましたのは、かけがえのない指導者と協力者があつてこそだと思っております。今回の受賞を励みに今後も悪性グリオーマの病態解明、新しい治療法の確立に向けて精力的に研究を進展させる所存です。今回の受賞に際し、関係各位の諸先生および研究の機会を与えていただきました脳神経外科前教授の山下純宏先生、研究を厚くサポートしていただいております脳神経外科 濱田潤一郎教授と医局員の先生方に心より深謝致します。

## 平成二十二年度(第七回)

## 金沢大学十全医学賞

金沢大学医薬保健研究域 医学系  
視覚科学(眼科)

小林 顕(II会員)

この度栄誉ある第七回十全医学賞を受賞することができ、金沢大学で研究活動を行う一人として大変光栄に存じます。また、本年六月十五日には、授賞式ならびに記念講演の機会も与えていただきました。誠にありがとうございます。私のテーマは、レーザー生体共焦点顕微鏡を用いた角膜炎患者の高解像度生体画像解析です。角膜上皮下に存在する、新しい網目状構造物(不structureと命名)の発見や、角膜ジストロフィにおける遺伝子型と生体におけるミクロの表現型の対応などが今回の中心的な研究内容です。生体角膜における病理組織学は、私が十年以上に亘り研究を続けているテーマですので、本研究内容をご評価いただきまして大変嬉しく光栄に存じます。それと同時に、「今回の受賞を励みとして、今後とも研究を続けてください」という井上正樹十全医学会会長のコメントに身の引き締まる思いがしました。今後も若い先生たちと一緒に、精力的に研究を続けていく所存です。なお、本研究遂行にあたり、終始ご指導ご助言を賜りました杉山和久教授をはじめ、これまで多大なご協力をいただきました当教室の先生方、一緒に研究に携わった先生方に対して、心より深く感謝いたします。十全医学会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻いただきますよう宜しくお願い申し上げます。

## 第九回 高安賞

平成二十三年七月二日に金沢大学十全記念館で開催された十全同窓会総会の席上で、大井副研究科長から三名の医学系研究科大学院修了者に「高安賞」が授与された。最優秀論文賞は王飛博士に、優秀論文賞は中野博博士と田中千洋博士に授与された。

「高安賞」は、高安病の発見者である高安右人先生(本学眼科三代目教授、旧制金澤医科大学の初代学長)の本学および我が国、世界に対する多大な貢献と業績を記念して平成十五年に制定されたものであり、今年で九回目となる。その疾患は明治四十一年四月に福岡市で開催された第十二回日本眼科学会で最初に報告された。またその原著論文は十全会雑誌第五十号に掲載されている。

「高安賞」は本学同窓会会員白井溢氏(昭和三十九年卒業)からの寄付を基金として発足したものである。対象は、医学系研究科の博士課程を修了した者で、優れた学位論文を発表したと評価された者を表彰し、研究科の学術研究の振興および若手研究者の育成に貢献することが目的である。毎年、複数の委員からなる「高安賞」選考委員会で厳正な審査が行われ、今年は六十二編に及ぶ英文学位論文が選考対象となった。今回選ばれた右記三名、また僅差で及ばなかった新医学博士の皆さんには今後も研究、診療にと大いに活躍され、本学のさらなる発展に貢献されることを希望します。

(松井 修 記)

### 第七回 黒川良安賞及びスロイス賞

医王保護者の会の支援に基づき医学類の成績優秀学生を顕彰する黒川良安賞及びスロイス賞の授与式は、今年で七回目を迎えた。

黒川良安賞は、卒業する学生のうちから選ばれた杉田浩章さん、横本竜徳さん、

### 学会報告等

## 日本分子生物学会第十一回 春季シンポジウム・金沢国 際がん生物学シンポジウム

二〇一一年五月二十五〜二十六日、日本分子生物学会第十一回春季シンポジウムおよび金沢国際がん生物学シンポジウムの合同シンポジウムを開催しました。日本分子生物学会は毎年十二月に開催されますが、その規模は拡大の一途を辿り、年会の開催が少数の大都市に限られるようになっております。こうした状況を補完し、地域の分子生物学研究の発展と理解の促進を目的に、二〇〇一年より地方都市での開催がスタートし、本年度は金沢で開催することになりました。一方、金沢国際がん生物学シンポジウムは、がん生物学の理解、海外の研究者との交流を目的に、毎年、金沢大学がん進展制御研究所が開催しております。今回は、日本分子生物学会と金沢大学がん進展制御研究所が共同で合同シンポジウムとして

丹羽智さんの三名に対して、平成二十三年三月二十二日の学位記伝達式の席上で授与された。

またスロイス賞は、三年次を修了した学生のうちから選ばれた松下祐紀さん、後藤久典さん、東郷泰平さんの三名に対して、平成二十三年四月七日の入学式当日に開催された医王保護者の会総会の席上で授与された。(井関 尚一 記)



開催することになりました。本シンポジウムのねらいは、広く分子生物学・がん生物学に関わる研究者・学生が一同に会し、交流を深めることとし、そのため、ひとつの領域に偏ることなく、できるだけ広くテーマを設定いたしました。その目玉として、がん生物学の話題を提供するInternational sessionを設けるとい

### お知らせ

各支部における同窓生の学術的・医療的活動状況について寄稿をお待ちしております。

〒九二〇-八六四〇 金沢市宝町十三二一  
金沢大学医学部十全同窓会会報係  
TEL 〇七六-二六五-二二三一  
FAX 〇七六-二三四-二〇八  
E-mail juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

う形式をとりました。

特別講演として、京都大学大学院医学研究科長田重一教授、(財)先端医療振興財団先端医療センター鍋島陽一センター長にそれぞれアポトシス、Kotko familyの生理機能に関する素晴らしい講演をいただきました。International sessionでは、国立シンガポール大学伊藤嘉明教授をはじめ、オーストラリア、韓国からの研究者に加え、本学がん進展制御研究所の高橋智聡教授、フロンティアサイエンス機構のRichard Wong准教授による発表があり、最新のがん生物学の進展に関して大いに盛り上がるセッションとなりました。その他、様々な研究領域の最先端のご発表があり、多くの聴衆を魅了するセッションが続きました。

ポスター発表では、本学医学系研究科博士課程の教員・学生を含む計九十六演題の発表があり、二日間で延べ七四三人(二日目:三五五人 二日目:三八八人)が参加し意見交換が行われました。ポスター会場においては、積極的に発表者に質問する光景が見られるなど、分子生物学・がん生物学に対して理解を深める絶好の機会となりました。またセッション

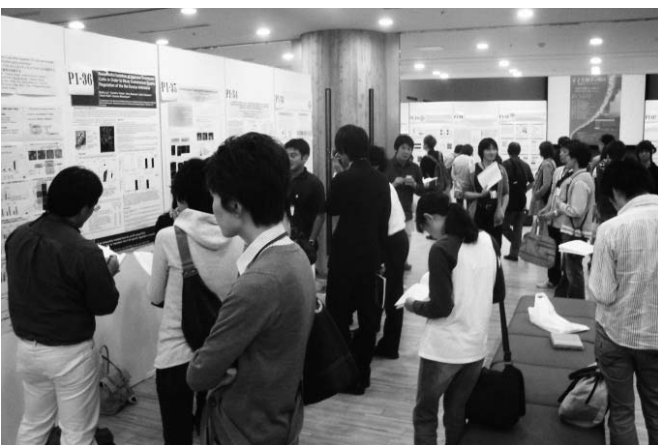
### お詫びと訂正

第一四八号の記事に誤りがありました。お詫びを申し上げ、訂正させていただきます。

二十頁 平成二十三年度医薬保健学  
域医学類入学者 出身都道府県 図  
《正》宮城 一 宮崎 一  
《誤》宮城 二

の合間には、オーケストラアンサンブル金沢のメンバーによる弦楽四重奏が演奏され、リラックスした雰囲気の中でサイエンスを楽しむシンポジウムとなりました。本学の医学教育・研究の推進に貢献できる有意義なシンポジウムであったと思えます。

(平尾 敦 記)



## 平成二十三年 度 十全医学会学術集会開催さる

去る六月十五日(水)に十全講堂において平成二十三年度十全医学会学術集会が開催された。今年度は、清水徹教授、市村宏のコーディネートのもと『感染症研究の最前線―ウイルス、細菌、寄生虫との闘い―』と題して、学外四名と学内一名の講師の講演が行われた。平日の午後にもかかわらず総勢一九八名の来場者があった。

最初に、谷内江昭宏集合理事による開会の辞があり、第一席として東京大学医学研究所感染・免疫部門感染症国際研究センター長の河岡義裕教授による講演「パンデミックインフルエンザ」が市村の司会のもと行われた。同氏はリパース・ジェネティクスという技術を用いてインフルエンザウイルスを人工的に作り出すことに初めて成功した世界でもトップの研究者で、「新型インフルエンザ」に関する最新の研究成果について話された。

次いで、本学医薬保健研究域薬学系の吉田栄人教授による講演「昆虫ウイルスベクターを用いた新規マラリアワクチンの開発」が、また大阪大学微生物病研究所・難治感染症対策研究センター長の堀井俊宏教授による講演「マラリア原虫のアキレス腱を標的とするSE36マラリアワクチン開発」



河岡 義裕 先生

が所正治講師の司会のもと行われた。全世界で、年間三〜五億人がマラリアに感染し、一〇〇〜一五〇万人が死亡するといわれており、ワクチン開発に大きな期待が寄せられているが、両教授は、マラリアワクチン開発に関する最新の成果について話された。



堀井 俊宏 先生

続いて、国立国際医療研究センターエイズ治療・研究センター長の岡慎一先生による講演「HIV感染症：治療の進歩とウイルスの進化」が市村の司会のもと行われた。同氏は日本のエイズ研究のリーダーの一人で、日本人に多いHLAタイプからのエスケープ変異ウイルスが蓄積して来ており、日本ではウイルス感染後短期間でエイズを発症する症例が増えていること、しかし最近の治療法の進歩により発症を大幅に遅らせることが出来るようになってきていることなど、HIV感染症に関する最新の研究成果について話された。

最後に、東京大学大学院新領域創成科学研究科/オーミクス情報センター長の服部正平教授による講演「腸内マイクロバイオームのゲノム研究」が清水徹教授の司会のもと行われた。次世代シーケンサーを用いた腸内細菌叢に関する新たな知見についてお話しされた。

以上、感染症研究の基礎から臨床まで最新の知見が発表され、来場者一同深い感銘を受けた。本学感染症研究の発展に大きく寄与する学術集会であった。

(市村 宏 記)

## 第四十八回日本消化器 免疫学会総会を主催

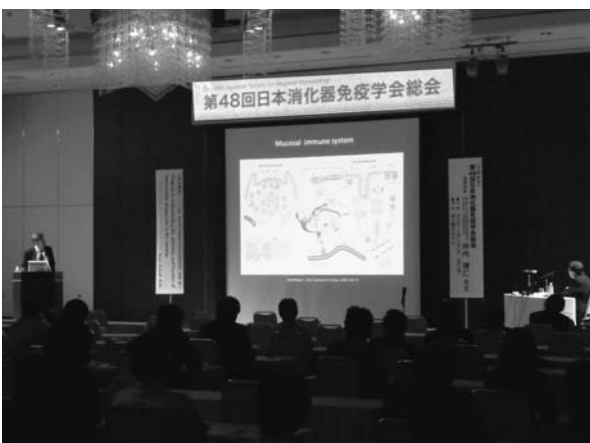
平成二十三年七月二十一日(木)、二十二日(金)の二日間、金沢市のエクセル東急ホテルで、第四十八回日本消化器免疫学会総会を開催させて頂きました。本学会は、三十余年の歴史を持つ伝統ある学会であり、二〇〇名弱の参加者があり、活発な議論があり、盛会でした。

本総会では、消化器での免疫制御や免疫が関連した消化器疾患の免疫病態の解析、さらに消化管、肝胆膵における各種疾患の新たな治療法に関する発表が行われ、基礎医学と臨床医学各々の立場からの意見交換と交流が行われました。主題として、(i)炎症性腸疾患の免疫病態 - Bench & Bedside、(ii)消化器疾患の免疫療法、(iii)IgG4組織反応と肝胆膵疾患、の三つのシンポジウムがあり、炎症性腸疾患に関する最新の知見、消化器疾患の新しい治療法に関して活発な議論が行われました。また、IgG4関連疾患とIgG4組織反応に関する最新の成績が発表され、会長の中沼が当教室の最近の知見を、基調講演として発表しました。特別講演として、米国NIHのMucosal Immunobiology SectionのBrian Kelsall先生が「Progress in understanding the definition and function of mononuclear phagocytes in the intestine」のタイトルで特別講演を行いました。腸管におけるdendritic cellとmacrophageの機能に関する、最新の成績の発表であり、好評でした。東京慈

恵会医科大学の錢谷幹男先生には、「自己免疫性肝炎とオーバールラップ症候群…最近の展開」の教育講演を行って頂き、愛媛大学の恩地森一先生には、「樹状細胞との出会いから免疫療法と栄養療法まで」の教育講演を行って頂きました。また、私どもの教室出身で、ピッツバーグメデイカルセンター移植研究所に留学中の一瀬久美子先生は、免疫多重染色の方法をモーニングセミナーで、奇麗なスライドを用いて解説され、多くの会員に感銘を与えました。

一般演題、主題で、準備された演題が発表され、また活発な議論が展開されました。また、日本に接近していった台風6号も、学会前日に日本から離れ、天候も回復し、実りある学会となりました。これも十全同窓会会員の日頃のご支援の賜り物と感謝しております。

(中沼 安二 記)





## 金沢大学 関連病院長会議

今年度の金沢大学関連病院長会議は平成二十三年七月二日(土)金沢大学附属病院の宝ホールで開催されました。この会は約一〇〇近い金沢大学関連病院院長(石川・富山・福井・その他)により構成されており、ここに金沢大学サイドから病院長(富田)はじめ、医学類長(井関)、保健学系長(大竹)、十全同窓会理事長(加藤)、各副病院長、全診療科の教授、医局長が出席し、意見交換と懇親を深めました。総会の議事、会計報告等が滞りなく終了したあと、引き続き病院長として、初期研修医及び若手医師の動向に焦点を当て、重点的に以下の内容のお話をさせていただきました。即ち各県の病院長から圧倒的に多く寄せられていた質問が、医師不足・その後の動向でしたので、過去十年間の金沢大学附属病院のデータをもとに、その回答をしっかりと盛り込んだつもりです。

その要旨は、新臨床研修制度が軌道修正されたのに伴い、北陸では関連病院の協力体制と支援のおかげで、医療崩壊が鎮静化しつつある、という内容です。

①金大入局者は制度以前に向けて徐々に回復傾向!(グラフ参照)

「医師研修は二年のみでは身も立たず、大学病院と関連病院とが親身になって六〇十年、連携して育ててこそ花実も結ぶ」という親心が医学生にも浸透してきたように思われます。一方、今年の全国大学病院長会議において、大都会では二〜四

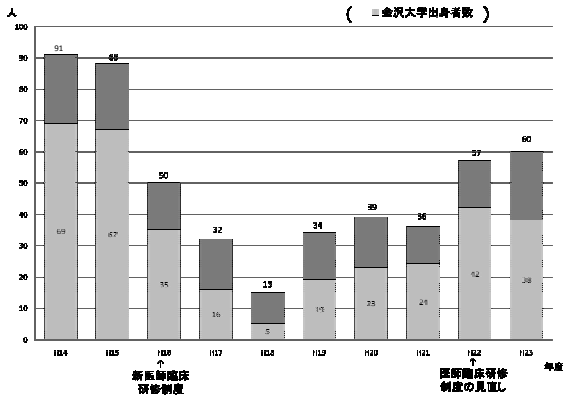
年の初期研修を終えた若手医師が、その後「迷える子羊(ジブシー)化」していることが問題と囁かれはじめていました。

②「石川県地域医療支援センター」の活動の紹介

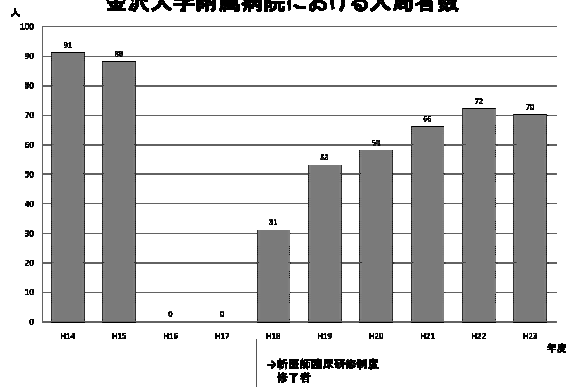
これは金沢大学附属病院と石川県が中心となり、若手医師教育を支援することを目的として設立された中間法人です。ここへ多くの関連病院からの自発的な支援を頂き、おかげで初期研修医や若手医師の教育支援活動に幅を持たせられるようになりました。有形無形の形で関連病院に還元されているはずです。

③(仮称)金大病院・医療人・生涯学習センター(CPD Center)の設立準備  
研修医のみならず、若手医師、中堅医師、そのほか能力向上を目指す医師、ナ-

金沢大学附属病院における初期臨床研修医  
(=金沢大学出身者数)



金沢大学附属病院における入局者数



スなどがスキルアップできる場、地域病院とメディア交流できる場を提供し、誰もが医療の進歩をアップデートできるセンターを計画中です。

なお、今回は出席して頂いた附属病院の診療科教授・医局長の全員にワンポイントアピールをしていただきましたが、限られた時間のなか、タイムオーバーされた方にはcow-bellを鳴らさせていただき失礼しました。各関連病院の病院長の中にも、発言したい方も多くいらっしゃったことと思います、これに懲りずいろんな機会にご意見をお寄せ頂ければ幸いです。

(富田 勝郎 記)

## 御遺骨返還式・ 合同慰霊祭

平成二十三年年度の御遺骨返還式・合同慰霊祭は六月十八日(土)午前十時、十全講堂での文部科学大臣感謝状伝達式から始まりました。中越 米雄総務課長による開式の辞に引き続き、平成二十二年度の献体者のご芳名が拝誦され、井関尚一医学類長よりご遺族おひとりおひとりに文部科学大臣感謝状が伝達され、感謝の言葉をご家族の皆様述べられました。

献体者御遺骨返還式は午前十時半から、ご遺族の皆様、しらゆり会会長 井沢義武様、理事長 竹山雅万様をはじめ



めとしたしらゆり会役員の方々、会員の皆様にご出席いただき、井関 尚一 医学類長、医学系研究科・医学類と附属病院の教職員、医員、学生が出席して始まりました。名誉会員二十四名のご冥福を祈って黙祷をささげた後、祭主の井関 尚一 医学類長が追悼の言葉を述べられました。出席者全員が壇上の御遺骨に感謝の気持ちをごめて献花をし、井関 尚一 医学類長から御遺骨がご遺族に返還されました。最後に学生を代表して谷中 惇君（三年生代表）が感謝の言葉を申し上げ、解剖学教育と献体業務の担当者を代表して機能解剖学分野 尾崎 紀之教授がお礼の言葉を申し述べました。

合同慰霊祭卯辰山墓地法要は午後一時から金沢大学医学部卯辰山墓地において、覚林寺ご住職のご読経とご講話を賜り、肅然と営まれました。ご遺族としらゆり会の皆様のご臨席を仰ぎ、井関 尚一 医学類長、教職員と学生が参列し焼香参拝しました。この墓地には、明治二十年の第四高等学校医学部から現在に至るまでの、約六千名の献体者の芳名墓碑が三十四あり、井関 義武会長のご尽力もあり、金沢市よりその整備についてご配慮をいただいています。

第一〇九回合同慰霊祭は午後二時半に始まりました。祭壇には正常解剖と病理解剖に御体を捧げられた百七十五名のご芳名を記した聖額が立てられ、ご遺族とご来賓、しらゆり会役員ならびに会員の皆様のご臨席を仰ぎ、井関 尚一 医学類長、杉山 和久附属病院副病院長、医学系研究科・医学類・附属病院の教職員、そして学生が参列しました。黙祷の後、井関 尚一 医学類長が追悼の言葉を述べ

られ、出席者全員が献花をしました。最後に杉山 和久副病院長が謝辞を述べられ、午後三時半過ぎに終了となりました。

七月七日（木）、金沢大学医学部卯辰山墓地で献体者孟蘭盆会法要が営まれました。しらゆり会会長 井関 義武様、しらゆり会役員の方々のご出席を仰ぎ、井関 尚一 医学類長をはじめとする医学類の教職員多数の方々も参列されました。覚林寺ご住職のご読経を賜り、参列者一同で献体者のご冥福を祈りました。墓地法要終了後、十全同窓会が平成十四年十月に修造して下さったホルトルマン（金沢医学所教師）愛児（明治十二年歿）の墓碑にも参拝しました。

（尾崎 紀之 記）



## 医学展開催に向けて

昨年度に引き続き、今年度も十一月五・六日に医学展を開催することが決定いたしました。二〇二一年度医学展開催へ向けて、同窓会の皆様方にはご支援、ご協力を賜り、医学展実行委員一同深く御礼申し上げます。

二〇二一年三月十一日、わが国は大震災に見舞われました。その様子をニュースで目の当たりにし、医療を志す人間として、何かしたい、何かできることはないのかと思いました。

資格は持たなくとも、医療に関して少なからず関わっているという微妙な立場の医学生。そんな医学生に何かできないだろうか？という思いとともに本年度の医学展が動き出しました。今年の医学展では、そういった「今だからこそ出来ること」を考えていきたいと思えます。

その一つとして、今年の医学展では災害と医療について考えていきたいと思えます。災害の場での医療活動や、医療者でなくても行える救命活動、さらには放射線問題：これらを取り上げること、来ていただいた方に、間違った知識に惑わされることなく、自分たちで正しい知識のもとに考えて行動できるようなっていただけたらと思います。また、昨年に引き続き「模擬病院」企画では、昨年までは内科、産科、外科ブースのみでありましたが、整形外科や精神科などの他科のブースを増やし、リハビリ、看護ブースを含めて、病院の今を知っていただきたいと思います。基礎医学研究

では昨年同様に「キンストレイキ」の展示を行い、薬学、微生物学ブースでも興味深い内容を企画しています。他にもまだまだ企画はございますが、「災害と医療」、「模擬病院」、「基礎医学研究」、この三つを大きな柱にして、今日の医療、明日の医療：私たちが提供できる限りで最大限のものを考え、来場者の方々に提供していきたいと思えます。

一学生に過ぎない個人的意見を書いておがましいですが、近年、医療に関して様々な情報が公開されるようになった一方で、医療に対する不信感や不安、理解不足というものが未だに残っているように思えます。医学展に来ていただき、医療に触れていただくことで、医療に対する不安や疑問が少しでも軽減され、医療をより身近に感じていただき、医療に対する人々の考えに多少なりとも良い変化をもたらせたらと思えます。そうすることが一人でも多くの人の命を救い、一人でも多くの人の幸せに繋がれば幸いです。それが今、私たちが学生という立場から社会に対してできることの一つではないかと考えています。

このような機会を与えていただいたことに深く感謝しつつ、医学展当日まで、今だからこそできること「を考えたが貪欲に取り組んでいく所存でございませぬ。ぜひ、お時間をみつけてご来場いただけたら幸いです。末筆ではございますが、日ごろからのご支援、ご鞭撻に感謝して挨拶とさせていただきます。

（医学展実行委員会 委員長

五年 竹下 諒 記）

# 十全学術行脚 第二十二回 金沢医科大学——基礎医学系——

金沢医科大学は、昭和四十七年の開学以来、「倫理に徹した人間性豊かな良医の育成」を建学の精神とし、医学・医療・医道を三本柱としたバランスのとれた医師の育成を目指して教育に取り組んでいます。爾来、約四十年の星霜を経、昭和五十七年大学院医学研究科開設、平成元年総合医学研究所開設、平成十五年四月には大学院医学研究科の新専攻（生命医科学）改組、平成十六年四月学部講座制を再編し、教育・研究の活性化と充実が図られています。平成二十三年八月現在、金沢大学医学部卒業・大学院修了あるいは金沢大学に勤務された十全同窓会関係の方々が、六十三名（三十三部門）在籍されています。今回の学術行脚では、現職の教授・准教授・講師の在籍される基礎系の各講座・部門における学術内容を紹介いただきました。



一. 安田幸雄・部門教授（医学教育学）

安田幸雄教授（昭和四十八年卒業）は、医学教育学を担当されています。

卒業後、金沢医科大学形成外科に入局、塚田貞夫教授の指導のもとに、瘢痕の成熟・色素沈着機序の探求、皮膚色素性病

変へのレーザー照射の影響の検討、広範囲熱傷の早期治療法の開発を行いました。平成六年救命救急科に移籍してER型救急医療を学びました。平成十三年から新設の医学教育学講座で医療概論・医療コミュニケーション・医療倫理の領域の授業を担当しながら、これからの医師を養成するのに必要な、チーム基盤型学習、ITによる学習支援、シミュレーション医療学習、ノンテクニカルスキルの習得、などの新しい医学教育技法の研究開発を行っています。



二. 山田裕一・部門教授（衛生学）

山田裕一教授（昭和五十年卒業）は、衛生学を担当されるとともに、平成十九（二十二）年に学長を務められました。

臨床研修中に「職業性ぜんそく」に出会って職業性呼吸器疾患に興味を持ち、労働科学研究所で故・佐野辰雄博士にじん肺の病理を学びました。じん肺の根絶を目指して研究する意義と気概を教えてください。佐野先生が、私の一生の恩師です。当時、アスベスト研究のメッカであったニューヨーク、マウントサイナイ医学校で、鈴木康之輔教授から石綿肺の病理に

ついて指導を受けました。帰国後の昭和五十七年に金沢医科大学衛生学に奉職し、能川浩二教授の下で産業保健全般の研究に従事し、平成二年から教室を主宰する立場になりました。教室全体としては職業性ストレス、筋骨格系障害にも取り組んでいます。私個人としては労働者の生活習慣に関わる健康問題として、飲酒による高血圧の発症機序解明などを進めてきましたが、現在は喫煙とCKD発症の関係について検討中です。現在、日本社会医学会の理事長を拝命しており、微力ながら、学会活動の活性化に努力をしています。



三. 篠原治道・部門教授（解剖学Ⅱ）

篠原治道教授（昭和四十九年卒業）は解剖学を担当されたとともに、副学長・理事をお務めです。

卒業後に産科婦人科学をへて、昭和五十五年富山医科薬科大学助手（解剖学）、松田健史教授（昭和二十三年、旧金沢医科大学卒業）の指導を受け、肉眼解剖学および電子顕微鏡的研究に従事しました。昭和五十七年七月から一年間、ハワイ大学解剖学教室へ留学し、柳町隆造教授のもとで性腺系の解剖学および生殖生物学の研究に従事。平成七年、富山医科薬科大学医学部看護学科教授（解剖学）。平成十一年、金沢医科大学教授（解剖学）。十九世紀前後のドイツ解剖学に源流をもち、古典的発生学の立場から神経経特異性を基盤として人体構造を考究する従来解剖学にあきたらず、光学・電子顕微

鏡を使った発生学的事実にもとづいた肉眼解剖学を指向した。ゴールデン・ハムスター卵巣の発生解明、頭尾軸に対応した椎骨の形態変化と臨床的意義、大胸筋や後頭下三角構成筋における神経支配様式の多様性分析、脳下垂体・涙器の微細構造解明、脳の線維解剖などの業績がある。また、近年は美術解剖学の分野でミケランジェロ、ロダン、ベルニーニ、運慶、写楽などを解剖学的に論じている。



四. 中川秀昭・部門教授、櫻井勝・准教授（公衆衛生学）

中川秀昭教授（昭和五十年卒業）は、平成七年より公衆衛生学を担当されるとともに本年九月より大学院研究科長をお務めです。常勤スタッフは併任を含めると教授二名、准教授三名、講師一名、助教一名で、金沢大学出身は櫻井勝准教授（平成九年卒業）、長澤晋哉助教（平成八年卒業）が在籍しています。教室の研究テーマは、循環器疾患など生活習慣病予防、カドミウムやダイオキシンに関する環境保健、産業医学、先天異常の疫学、難病の疫学など多岐に渡っていますが、これは「疫学」という大きな柱に貫かれています。生活習慣病予防に関する研究では、地域・職域集団において脳卒中や心筋梗塞など循環器疾患発症を追跡するコホート研究を二十年以上継続しており、各地のコホート研究を統合する国内および海外の共同研究にも参加しています。これらの研究成果は循環器疾患予防やメタボリックシンドローム政策に重要な知

見を提供しています。また、塩と高血圧に関する国際共同研究INTERMALTや血圧と栄養に関する四ヶ国国際共同研究INTERMAP、INTERLIPIDは各国の研究者とともに研究を行っています。環境保健に関する研究も重要なテーマの一つです。イタイイタイ病等カドミウム慢性中毒の疫学研究は代々の教授により継続されています。現在イタイイタイ病発生地域の神通川流域住民の大規模な予後調査を実施しています。近年注目されているダイオキシンの生体影響に関する研究にも金沢大学保健学系看護科学城戸照彦教授（昭和五十四年卒業）とともに取り組んでいます。これらの研究は国際的にも高く評価され、ベトナムやタイとの国際共同研究が進行中です。産業保健に関しては、職業要因と循環器疾患についての研究、塵肺に関する長期追跡研究などを行っています。



**五. 岩淵邦芳・部門教授（生化学Ⅰ）**  
 岩淵邦芳教授（昭和五十九年卒業）は生化学を担当されています。第三内科（現血液内科・呼吸器内科）の松田保名誉教授、中尾真二教授のもと、骨髄移植における移植免疫の研究を行い、昭和六十三年に金沢大学大学院医学研究科（血液病学）を修了した。ニューヨーク州立大学ストニーブルック校へ留学した後、平成七年より三年間金沢医科大学血液免疫内科に在籍し、その後金沢医科大学生化学Ⅰに移籍。主任教授となって三年目である。研究テーマは、X線照射を受けた細胞が、

どのようなプロセスを経て癌化していくのかを明らかにすることである。X線を受けた細胞にはDNA二重鎖切断というDNA損傷ができる。DNA二重鎖切断が速やかに修復されない、切断部位で転座などの染色体異常が発生すると考えられている。この染色体転座に関わる蛋白質群を解明したいと若い教室員とともに奮闘中である。

米倉秀人教授（生化学Ⅱ）は、一九九六～二〇〇六年に生化学第二講座、血管分子生物学研究分野（山本博教授）に助教、准教授として在籍。二〇〇六年四月金沢医科大学生化学Ⅱ教授として着任しました。教育では、第一学年の「代謝と遺伝Ⅰ」講義、第二学年の「代謝と遺伝Ⅱ」講義、実習を担当しています。また一学年「医学セミナー」、二学年「PBL」も分担担当しています。現在の医学・医療では、分子・遺伝子レベルでの理解・説明が必須となっています。こういった状況に適切に対応できる医師・医学研究者の養成を意識して、教育・研究に取り組んでいます。二〇〇八年から二学年主任、二〇一〇年九月から教務部副部長。二〇〇九年四月から組換えDNA実験安全委員会委員長。現在の研究テーマは、



**六. 米倉秀人・部門教授（生化学Ⅱ）**  
 米倉秀人教授は、一九九六～二〇〇六年に生化学第二講座、血管分子生物学研究分野（山本博教授）に助教、准教授として在籍。二〇〇六年四月金沢医科大学生化学Ⅱ教授として着任しました。教育では、第一学年の「代謝と遺伝Ⅰ」講義、第二学年の「代謝と遺伝Ⅱ」講義、実習を担当しています。また一学年「医学セミナー」、二学年「PBL」も分担担当しています。現在の医学・医療では、分子・遺伝子レベルでの理解・説明が必須となっています。こういった状況に適切に対応できる医師・医学研究者の養成を意識して、教育・研究に取り組んでいます。二〇〇八年から二学年主任、二〇一〇年九月から教務部副部長。二〇〇九年四月から組換えDNA実験安全委員会委員長。現在の研究テーマは、

（一）VEGF受容体の選択的mRNAプロセシングとそれによる血管新生の調節機構、（二）血管と神経の相互作用の分子機構、（三）眼の機能維持と病態発生の分子機構です。

**七. 西尾眞友・部門教授（薬理学）**



西尾眞友教授（昭和五十二年卒業）は薬理学を担当されるとともに入試センター長をお務めです。金沢大学大学院（薬理学・正印達教授）修了後、福井医科大学薬理学助手、米国ノースウェスタン大学研究員、秋田大学薬理学助教を経て一九九四年より現職。「興奮性細胞の機能制御機構に関する薬理的・生理学的研究」を教室の主な研究テーマとし、イオンチャネルの機能を解析するため、パッチクランプの手法を取り入れた研究を行ってきた。興奮性細胞だけでなく、非興奮性細胞の増殖、分化、アポトーシスなどに関与するイオンチャネルおよび細胞内Ca<sup>2+</sup>動態についての解析も行い、治療における新しい分子標的を探索するための研究を進めている。一九九九年～二〇〇六年には薬剤部長を併任、二〇〇二年からは臨床試験治験センター部長を併任し、臨床薬理学を含む広い視点に立って教育、研究および大学の運営に携わっている。

**八. 上田善道・部門教授、佐藤勝明・准教授（病理学Ⅱ）**  
 上田善道教授（昭和五十六年卒業）は、卒業後、天理よろづ相談所病院でジュニア・シニアレジデントとして臨床医学と外科病理学を研鑽した後、第一病理学教室の中西功夫名誉教授のもとで骨軟部腫瘍の細胞外基質成分に注目した人体・分子病理学的研究をスタートした。ポストドクとしてドイツでの研究生活の後、天理よろづ相談所病院で第一戦の外科病理医として活躍していたが、平成六年、勝田省吾教授（現金沢医科大学長）に招聘され、助教として金沢医科大学に赴任した。平成二十三年七月に後任として部門教授に就任した。専門は骨軟部腫瘍と呼吸器系腫瘍で、前者に関しては二十年以上に渡り土屋弘行整形外科現教授、Magduburg大学病理学研究所（独）Research教授らと共同で間葉系悪性細胞の浸潤・転移機構や薬剤耐性機構に関し研究を展開している。金沢医科大学に赴任後は肺癌グループの一員として進展機構の分子病理学的解明のほか、新規画像診断法の確立に向けた集約的医療にも貢献している。更に、卒前医学教育改革にも深く関与し、PBL導入やカリキュラム改革において中心的役割を果たしてきた。



佐藤勝明准教授（平成五年卒業）は平成十六年に第一病理学教室から赴任した。卒業後

七年間は神経内科学教室で高守正治名誉教授のもとで重症筋無力症の研究を行うとともに、神経内科領域を中心に内科全般にわたる臨床研修を積んだ。平成十二年より第一病理学教室で中西功夫名誉教授および小田恵夫先生の指導のもとで病理学の基本を学んだ。金沢医科大学赴任後は、豊富な臨床経験を活かしてあらゆる臓器の腫瘍性ならびに非腫瘍性疾患に関する病理組織診断と細胞診に従事し、臨床医とのディスカッションを通して正

確かつ迅速な病理診断を提供できるように努めている。病理診断では特に泌尿生殖器系の腫瘍に興味をもっており、教育面では実物を観察する実習に重点をおき指導しており、研究面ではTISの法を用いた細胞遺伝学的アプローチの腫瘍病理診断への応用に関し人類遺伝学教室と共同で展開している。

九、湊宏・特任教授（臨床病理学）



湊 宏教授（平成元年卒業）は形態機能病理学（旧第二病理学）、附属病院病理部の出身で、教室在中は中沼安二教授の下で肝臓病理の研究を行い、北陸地方の多くの病理の先達に診断病理の教えを受けた。病理部では呼吸器や頭頸部の診断病理に興味を持ち、アメリカ留学では主に呼吸器病理診断学を学んだ。病理部助教授・部長を経て、平成十九年四月金沢医科大学臨床病理学教室教授として赴任した。病態病理学および臨床検査医学の講義・実習を担当し、大学病院では病理診断科長として病理検体の診断、剖検、臨床教育を行っている。今後、北陸地方の若手病理医の育成を目指している。研究面では、肺縦隔腫瘍の病理学的解析や唾液腺を中心とした唾液腺関連疾患の研究を行っている。とくに最近では今後増加すると思われる悪性中皮腫の病態発生や診断、治療に関して、種々の癌抑制遺伝子や癌幹細胞の役割についての研究を進めていきたいと考えている。

十、友杉直久・教授（総合医学研究所・先端医療研究領域・加齢制御研究分野）



友杉直久教授（昭和五十年卒業）は、第一内科入局以来、腎臓病における炎症・免疫機序を研究してきましたが、従来の手法ではなかなか成果は得られず、今世紀に入りプロテオミクス技術を研究手段として取り入れました。この手法を用いて、幸い鉄代謝制御に重要な役割を演じている血清hepcidin-25を見つけることができ、現在はこのペプチドを鉄代謝の臨床評価に応用するまでに至っています。これをきっかけに研究は基礎領域にも深化し、現在は加齢を促進させる危険因子の解明を基盤として、加齢に伴う疾患（動脈硬化、がん、認知症など）に対する先端的診断・治療法の開発研究を行っており、病的老化の克服を目指しています。特に鉄代謝異常に伴う鉄過剰、食物中や体内で産生される終末糖化蛋白、さらに腸内環境の破綻に伴う代謝/免疫異常などで誘導される酸化ストレスを加齢促進の大きな要因と捉え、網羅的な蛋白質/遺伝子解析を駆使してその機序の解明を行っています。

高林晴夫准教授（総合医学研究所・先端医療研究領域・単一細胞研究分野）



高林晴夫准教授（昭和五十一年卒業）は、現在金沢医科大学FDD-MB Center がん

ター長を務めている。FDD-MB Center は、文部科学省・地域イノベーション戦略支援プログラム「ほくりく健康創造クラスター」のFDD-MB 3.0 Projectスタートと共に二〇〇八年九月一日に開設されました。これまでに十六機関五十名のメンバーがプロジェクトに参画しており、FDD-MB 関連特許（五件出願）、FDD-MB 商標取得など、既にいくつかの確かな成果が得られております。これからも理念・コミットメントをしっかりと共有し、all Japan体制で役に立（FDD-MB 3.0 Systemを完成し）、グローバルにFDD-MB Serviceを展開するための仕組みを戦略的に構築し、国際貢献・社会貢献したいと思っております。また、現在FDD-MB CenterはR&D機能を中心に運営されていますが、今後は当初計画に従いFDD-MB関連の教育・トレーニングセンター、インテリジェンスセンターとしての機能も充実強化して、グローバルな連携を視野に入れ、名実共にユニークかつ先端的なFDD-MB Centerとしてさらに発展させていきたいと思っております。

（横山 仁 記）



十全同窓会ホームページが開設されました

<http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp/>



## 病院紹介

### 珠洲市総合病院

はじめに

珠洲市は、石川県能登半島の最北端に位置し日本海に面した市で、珠洲焼、揚げ浜式塩田、平時忠公の墓石跡など有名であります。約一万七千人の人口のうち高齢者は三十九、六%で、少子高齢化のひとときが進んだ町であります。珠洲市総合病院は、珠洲市内唯一の入院施設を有する医療機関です。病床数は一九九床〔一般病床一六〇床、療養病床三十二床（医療保険型病床二十四床・介護保険型病床八床）、結核病床七床〕で、内科、外科、整形外科、脳神経外科、産婦人科、小児科、耳鼻咽喉科、眼科、泌尿器科、皮膚科、精神科、放射線科、リハビリテーション科の十三科を標榜しています。又大谷診療所と折戸診療所の二つの診療所を併設しています。常勤医師は内科七名、外科四名、整形外科二名、脳神経外科一名、産婦人科一名、小児科一名、耳鼻咽喉科一名の合計十七名です。地域の総合病院として救急外来対応や専門医療のみならず、医療施設が地域に少ないことからかかりつけ医としての一般診療や、訪問診療・往診・訪問看護・訪問リハビリ等の診療行為や介護の分野まで引き受けています。また健診部では、ドックや種々の形態の検診を行っています。

### 沿革

昭和二十五年十月、当時の珠洲郡飯田町他一〇カ町村により珠洲郡中央病院として一般病床三〇床、伝染病床十五床でスタートしました。その後珠洲市の誕生後は珠洲市国民健康保険中央病院と改称しました。三十九年には救急告示病院、五十三年には労災指定病院、五十四年には僻地中核病院の指定を受け僻地巡回診療を開始しています。五十九年には全身用CTスキャンを、平成四年にはMRIを設置しています。平成六年には訪問看護室の設置をしています。九年には、災害拠点病院に指定され、同年六月に当地に新築移転して現在の病床数となっています。当時県内公的病院で初めて療養型病床群を新設しています。十五年には僻地医療拠点病院に指定されています。

### 病院の現状と取り組み

「市民の心の支えとなる地域の中核病院に」の病院理念のもと、現在の病院職員で対応可能なすべての医療をこなし、市民の期待と要望に込んでいるのが現状です。珠洲市の高齢者二人世帯数一、〇〇〇余り、高齢者一人世帯数一、三〇〇余りそして高齢化率約四〇%を考慮すれば、この珠洲地区の医療は、介護を無視しては成り立たないのが現状です。行政機関と医療機関が連携をしながら、高齢者の心身の健康を早い段階から追跡することが必要となっています。

また当然ながら入院患者の年齢も高いため、退院後は在宅が可能なか或いは施設でないが無理なのかを、入院の早い段階から検討する会を定期的に院内で実施しています。その観点から、院内ソ-

シャルワーカーや市内のケアーマネージャーのかかわる役割は都市部に比しはるかに大きく、きめ細い対応がなされています。

ところで、当院は能登北部の公立病院で唯一常勤の脳神経外科専門医のいる病院ということで、脳卒中急性期・慢性期医療施設の指定を受けています。十二名のリハビリスタッフで対応し、往診リハビリも実施しています。また定期的によりハビリア実習生も受け入れています。

そのほか当院の産婦人科では母乳で乳児保育を実施する施設基準の取得に取り組んでいます。

現在石川県では地域医療再生計画の一環として寄附講座が設立され、内科・外科医師の派遣を受けています。又ハード面からの支援計画として、能登北部の四病院は中央医療圏（大学）と繋がる形で電子カルテの導入が計画されており、当院でもその導入準備に取り掛かっています。

### 課題と展望

医師・看護師不足は大きな課題であります。石川県の看護師修学資金制度を活用して将来の看護師確保ができる見通しが立ちつつ

ありますが厳しいのが現状です。又医師不足に対しても金沢大学の懸命なご努力によりようやく医師増員の方向に動きつつあります。

当院は、僻地の医療のあらゆる部門を一手に引受けて、市民のために存在し続けなければならない病院であります。引き続き金沢大学からの医師派遣に関する支援と、石川県をはじめとする行政の暖かい支援をお願いして稿を終えます。

（院長 追分 久憲 記）



病院紹介

市立砺波総合病院

はじめに

当院は昭和二十三年四月に富山県東砺波郡国保団体連合会「出町厚生病院」として開院し、昭和五十六年四月に現在の「市立砺波総合病院」の名称となった。開院時病床数は一〇〇床で職員数は五十一名であったが、増改築を繰り返しながら徐々に病院規模が大きくなり、平成十六年十月病院増改築事業竣工時病床数五一四床（一般病床四六一床、精神病床四十四床、感染症病床四床、結核病床五床）正職員は六三二名（医師八十一名、看護師三八一名など）を擁するようになった。当院は人口約五万人の砺波市の病院としてだけでなく、砺波市及び小矢部市、南砺市を含めた人口約十四万人の二次医療圏（砺波医療圏）の中核病院として、また地域救命センター、災害拠点病院、へき地中核病院、地域がん診療連携拠点病院、肝疾患診療連携拠点病院としての役割を担っている。

さて当院のある砺波市は、今年六〇回目をおかえた「となみチューリップフェア」と全国的にも珍しい「散居村」が有名である。更に砺波平野の中心に位置し、北陸自動車道と東海北陸自動車道、能越自動車道のジャンクションが存在する交通の要である。このことが地域経済発展に大きく寄与し、人口も漸増していることなどから、当市が雪国にもかかわらず二〇〇九年版住みよさランキング」総

合評価全国三位にランクされた。

砺波医療圏の特長としては、(一)住民の高齢化がある。平成二十二年の高齢化率は砺波市二四・四%小矢部市二九・八%南砺市三〇・九%と全国平均を上回っている。(二)に、この医療圏では公的病院のみで自己完結型医療を目指した時期が長かったため地域完結型医療を目指すのがやや遅れた感があったが、平成二十一年十一月に三市の副市長、公的病院長、医師会、消防などが一堂に会する「砺波医療圏地域医療検討会」が立ち上がり、やっとその途についたところである。

当院では平成五年より処方、検査、注射のオーダーリングシステムを稼働させ、平成十七年には電子カルテシステムを稼働、平成二十一年三月X線フィルムレスに移行、平成二十四年一月には次期電子カルテシステムの稼働予定である。看護体制は、平成十九年十月より七対一看護体制を導入した。

当院の特色

① 臨床研修看護師制度

平成十九年四月より臨床研修看護師制度を開始した。自治体病院としては全国で初めてであり、全国的に注目された。この制度を導入することにより、現場の看護師の意識改革がなされ、研修看護師以外の新採看護師への研修もスムーズにいくようになった。また、看護師の採用は、採用数以上の応募数を確保できるようになった。研修看護師全員が研修後当院の正職員となり病院を支える重要な人材となっている。

② 腹腔鏡下前立腺全摘除術の施設認定とコード125密封小線源療法

平成二十一年十一月北陸三県で初めて腹腔鏡下前立腺全摘除術を実施できる施設として、全国で四十七施設目として厚生労働省から施設認定を受けた。また、平成二十一年五月から初期の前立腺癌に対する組織内照射法である「コード125密封小線源療法」も富山県で初めて開始した。それにより当院泌尿器科では、大学病院を凌ぐ手術手技や治療法を有する、全国でも最先端を歩む科となった。

③ 女性骨盤底再建センター

平成十九年八月より同センターが稼働し、女性の尿失禁防止術および骨盤底再建手術を泌尿器科、大腸肛門科、婦人科の医師が協同で手術を行っている。

④ 局所麻酔下での経皮的内視鏡下腰椎椎間板ヘルニア摘出術(PELD)

平成二十二年十一月から北陸で初めてPELDを導入した。PELDを行える施設は全国でも一〇施設程度である。

⑤ 地域がん診療連携拠点病院と肝疾患診療連携拠点病院の指定と選定

平成十九年一月に地域がん診療連携拠点病院（主に肝臓）の指定を受け、平成二十一年三月に肝疾患診療連携拠点病院の選定をうけた。主に呉西地区富山県西部）の肝疾患を対象に治療を行っている。

⑥ 他院にはない特徴ある診療科として、

東洋医学科（漢方薬と鍼灸治療）、口唇口蓋裂センター、大腸肛門科などがある。

⑦ 当院では平成十四年よりTQM活動に

取り組み、全国大会でも何度も優秀賞を受賞している。また、昭和十五年より中国ハルビン市の中国黒竜江省医

院と日中友好医学交流を行っている。今後の問題として、砺波医療圏でも他の地域の例にもれず、慢性的な医師不足の状態であり、救命輪番体制の維持も難しくなってきた。さらに砺波医療圏では、高齢化率も高く、この地域で地域完結型医療をすすめていくためにも医療だけでなく、介護・福祉との連携をいかに進めていくかが大きな課題と考える。最後に、市立砺波総合病院は地域医療崩壊が叫ばれるなか、病院組織を安定して存続させるだけでなく、「地域に開かれ、地域社会に親しまれ、信頼される病院」の理念のもと、患者さんにも、職員にも愛される「優しい病院」として、地域住民に安心で安全な医療を提供し続けられるよう、頑張りたいと考えている。

(院長 杉本 立甫 記)



## 医薬情報統御学

(薬剤部)

薬剤部は、本院開設時（一八六七年）に薬局として設置されました。教室の始まりは一九八六年、故山名月中名嘗教授の時代で、薬学部四年生二名、大学院薬学研究科修士二名が配属されました。その後、故市村藤雄名誉教授時代に大学院自然科学研究科生命薬学専攻と医療薬学専攻が設立され、宮本謙一教授就任後、医学部大学院の部局化により医学系研究科循環医科学専攻医薬情報統御学研究分野が誕生しました。現在のメンバーは、宮本謙一教授（薬剤部長）、崔 吉道准教授（副部長）、長瀬克彦准教授（臨床試験管理センター副センター長）、澤本一樹特任助教、医学系研究科博士課程四名、修士課程二名、自然科学研究科博士課程十四名、薬学類（薬学部）四年生十六



年生各五名の計三十九名です。教室では薬学系臨床教員の協力も得て、医学生や薬学生、看護学生、研修医、救急救命士等に対して、臨床薬理、薬物動態、薬物間相互作用、処方構築法、個別薬物療法の理論、医療倫理やリスクマネージメント等に関する講義、BSL、アーリーエクスポージャーや薬学六年制の長期病院実務実習を行っています。

診療においては、全診療科の入院および外来処方せんの鑑査、計数調剤、計量調剤、院内製剤、抗がん剤およびTPNの混合調製、医薬品の安定供給と安全性、有効性、品質の確保に加え、病棟での入院患者に対する薬剤管理指導、外来化学療法を受ける患者への服薬指導、TDM (Therapeutic Drug Monitoring & Management)、薬物療法の効果と副作用のモニタリング、医療従事者への迅速かつきめ細かな医薬品情報提供（D-I）活動、処方支援にあたっています。さらに、院内の医薬品安全管理、適切な医薬品採用、管理によって病院経営にも貢献しています。臨床試験管理センターにも薬剤師五名が勤務しています。治験は薬事法や省令等を遵守しGCPに従って実施する必要があります。これを円滑に進めるため、様々な職種と協力して、治験や製造販売後臨床試験に加えて院内で医師等が実施する医薬品に関連する種々の臨床研究について、それらが倫理的かつ科学的に行われるよう支援を行っています。

研究面では、臨床において提起された疑問点、問題点の解決し、医薬品適正使用と患者QOL向上に資するため、基礎と臨床の両面での研究を展開しています。以下にくつか紹介させていただきます。

(一) シメチジンによるシスプラチン腎毒性軽減の作用機序の検討：骨肉腫担がんラッ

トや腎がん由来細胞株等を用いてシスプラチンが主に腎臓のCYP2E1活性の上昇を介して活性酸素種の産生を促進して臓器障害を惹起すること、また、シメチジンがシスプラチンの抗がん作用を減弱することなく腎のCYP2E1を抑制することによって腎障害を軽減することを示唆しました。

(二) 経腸栄養剤長期投与による薬物動態変動に関する研究：本院では栄養サポートチーム（NST）活動が活発で薬剤師もこれに大いに貢献しています。近年、入院患者の栄養管理が見直され、長期経腸栄養を行う患者数が増加していることから、臨床で用いられる半消化態栄養剤、消化態栄養剤および成分栄養剤をラットに摂取させ長期経腸栄養モデルを作成しました。いずれの経腸栄養も、小腸の組織形態には顕著な変化を与えませんが、消化管に発現する有機アミノトランスポーターやオリゴペプチドトランスポーター、P-糖タンパク質などに對してはそれぞれ異なる作用を及ぼし、ジゴキシンやセファドロキシルの消化管吸収に影響を与えることを示しました。現在、倫理委員会の承認を得て半消化態栄養剤投与中の患者のジゴキシン血中濃度を調べ臨床へのフィードバックを目指しています。

(三) 肥満によるインスリン抵抗性と脂肪肝炎の病態解明・治療法確立に関する研究：近年、生活習慣病としてのメタボリックシンドロームの二病態として注目されている非アルコール性脂肪肝（NAFLH）について、武蔵野大学油田教授らと共同研究を行っています。アールベータ生葉 *Sarcia reticulata* の抽出物は血清中 *adiponectin* を上昇させることで、また葛の花抽出物は肝臓および褐色脂肪に作用することで、それぞれ抗肥満効果を示すことが示唆されまし

た。また、恒常性制御学講座研究グループとの共同研究で、肥満による炎症とインスリン抵抗性をリンクさせているケモカインについて検討しています。

(四) 低用量アスピリン製剤の即効性に関する研究：急性心筋梗塞に対するMONA（モルヒネ・酸素・硝酸薬・アスピリン）療法で用いられる低用量アスピリン製剤の即効性の検証を目的にIRBの承認を得て臨床試験を行いました。制酸緩衝性製剤のパファリン錠は咀嚼の有無にかかわらず、アスピリン血中濃度、トロンボキサンA<sub>2</sub>、血小板凝集阻害作用のいずれもほぼ同様の動態を示すこと、また、腸溶錠であるバイアスピリン錠も、咀嚼服用することでパファリン錠とほぼ同等の血中動態を示し、速やかに血小板凝集を抑制することを示しました。

(五) 腎不全患者におけるリネゾリドの体内動態に関する研究：IRBの承認を得て、集中治療部と共同で持続的血液濾過透析（HDF）施行中の急性腎不全患者の血中および濾過透析液中リネゾリド濃度をLC/MSを用いて測定しました。HDF施行患者ではリネゾリド未変化体および代謝物の排泄が遅延することが明らかとなり、腎障害時や透析施行時の血中濃度モニタリングがリネゾリドの適正使用につながる可能性を示しました。

これらのほかにも、がん化学療法ははじめ各種の薬物療法中の副作用に注目し、集計・解析し、対策を立てながら患者が安心して治療を受けられるように取り組んでいます。医療の高度化に伴い、薬剤師の業務範囲が拡大し多岐にわたるようになりましたが、北陸の拠点病院としてさらなる薬剤業務展開と、それを担う優れた人材の育成と輩出を目指して頑張っています。（崔 吉道記）



## 組織発達構築学分野

(旧解剖学第一)

井関尚一教授の就任から早いもので二十一年目を迎えた。本同窓会報での教室だよりも四回目になる。まず、前回第一二八号以降の七年間余りの教室の出来事を紹介する。平成十九年二月に東北大学より中谷雅明博士が助教として転入した。中谷助教は発生生物学を専門とし、遺伝子改変動物のテクニクを教室に導入して、平成二十三年八月に横浜市立大学医学部に転出した。平成二十年四月から、仲田浩規氏(平成二十年本学卒業)が大学院生として研究に従事している。医学部出身の貴重な基礎医学者としてさらなる飛躍が期待される。平成二十年三月に、黒保美穂氏が医科学専攻修士課程を修了した。また、タイ国から継続して多くの留学生を受け入れた。まず、Naresuan大学のWiphawi Hipekao氏は、助手として滞在し、平成十六年十月に学位を取得して帰国後、現在Khonkaen大学の解剖学助教として教育と研究に活躍中である。Nathiya Sakulsak氏は、大学院生として滞在し、平成二十年三月に学位を取得して帰国し、現在Naresuan大学講師である。Sunisa Keattikunpairoj氏は、平成二十二年三月に学位を取得し、タイ国で就職した。平成二十一年十月、再びNaresuan大学からKannika Adthapanyawanich氏が大学院生として来日し、研究のみならず学生

実習にも積極的に参加している。

当教室は、種々の器官・組織の発生、生後発達、増殖、分化において重要な役割を演ずる種々の生理活性蛋白質の発現、局在およびその制御について研究している。研究手法として、主にマウスとラットを用い、蛋白質および核酸レベルの分子生物学的方法と、光学および電子顕微鏡レベルの形態学・組織化学的方法を組み合わせている。また、最近では遺伝子改変マウスの利用も増加している。井関教授は、マウス唾液腺における細胞分化、特に顎下腺導管系細胞の分化の性差に着目して、歴代のタイ人留学生を指導して研究を行ってきた。最近の研究課題は、増殖因子プレイオトロピンと受容体型蛋白質チロシンフォスファターゼβの導管細胞分化における役割、アンドロゲン受容体ノックアウトマウスを用いた顎下腺導管系細胞のアンドロゲン依存性分化機構の研究等である。若山友彦准教授は、精子形成の調節因子としての細胞接着分子の役割について、仲田大学院生とともに研究を行っている。当教室で発見した細胞接着分子Cadmi1 (cell adhesion molecule-1、旧名Sg(GSF))を中心として、精子形成に関係する細胞接着分子のノックアウトマウスの表現系の解析を行っている。山本美由紀助教は、電子顕微鏡を用いて主に末梢神経系を研究してきたが、最近ではマウス顎下腺の顆粒性導管におけるプロテアソームの役割について、恒常性制御学分野(旧第一内科)との共同研究を行なっている。また、当教室はがん局所制御学分野(旧第二外科)の太田教授の研究グループと十数年

来共同研究を行っている。

当教室の教育の担当は、医学類二年生の「細胞・組織の構造」と「人体の発生」、修士課程の「人体構造学」が主なものである。「細胞・組織の構造」は、春学期に総論、秋学期に各論の講義と実習を行っている。講義のスタイルは、講義室の改築に伴って数年前に板書からパソコンを用いたプレゼンテーションに代わった。一方、組織学実習のスタイルは、昔ながらの顕微鏡による組織・細胞の観察とスケッチである。解剖学は医学を学ぶ上でも基礎となる科目であるので、学生が解剖学の十分な知識をつけるとともに「観察する眼」を養うことを目標に掲げている。そのため、教室で新たに実習書を編さんした。また、実習の説明では、パソコンを用いて可能な限り多くの



顕微鏡写真を提示することを心掛けている。特筆すべきこととして、実習に用いている標本には数多くの電子顕微鏡写真がある。多くの大学では、もっぱら光学顕微鏡での観察を中心とした組織学実習が行われていると聞く。電子顕微鏡写真の観察ができるのは金沢大学の特徴と言える。「人体の発生」では、春学期に総論、秋学期に各論の顔面・口腔の発生の講義を担当している。発生学を通じて、学生が人体構造をより理解できるように講義を心掛けていく。修士課程の「人体構造学」は、解剖学系の他の二講座と共同で開講している。当教室は細胞学・組織学の分野を担当しており、医学部以外の出身者が人体構造を理解するための講義を行なっている。

教室一丸となつて研究と教育に励む一方で、季節毎の教室行事、春の花見、夏のビールパーティー、忘年会等々、教室の親睦を図っている。時には、旧解剖学の三つの講座(組織発達構築学、機能解剖学、神経分子標的学)で合同の親睦会に発展することもある。

この会報を発行する頃である平成二十三年九月二十四・二十五日に、宝町キャンパス医学類校舎を中心に、第五十二回日本組織細胞化学会総会・学術集会を当教室が主催する。学会が成功裏に終わったことを次号で報告することを願って教室だよりを終える。

(若山 友彦 記)

支部だより

大分支部

平成二十二年度十全同窓会大分支部会は、平成二十二年九月十五日例年と同じ大分市都町のふく亭本店で、中村信一金沢大学学長をお招きして開催されました。中村学長には、古林秀則 大分大学医学部付属病院長が金沢大学訪問の折、同学長の大分来訪の話がありご多忙中にもかかわらず来訪が実現いたしました。

当支部会員全員に加えて熊本市から児玉公道 熊本大学名誉教授・九州中央リハビリテーション学院院长、宮崎県から児玉先生と同級の河野寛一 宮崎市 潤和会記念病院リハビリテーション科部長



および田中松平 同県日向市千代田病院 外科医長が出席いたしました。

中村学長からは多くの資料を使って城内キャンパス、小立野キャンパスから角間キャンパスへの総合移転が完了した金沢大学の現況、新装なった付属病院、十年後にわが国のベスト10の大学となることを目指す金沢大学を浮き彫りにした熱のこもった説明がありました。

中村学長は当支部の土屋寿司郎 曾根病院脳外科部長と同級であり、また田中先生にとっては柔道部の顧問になっていた。いただいた先生とのことで大変懐かしく、またその他の来会者たちからも談論風発大いに話が弾みました。

既報、昨年度支部会で話題となった津市民病院産科閉鎖の危機問題は古林付属病院長の努力もあり、大分大学医学部地域医療支援システム事業産婦人科分野の吉松潤教授が同病院特任産婦人科部長(兼任)に着任。大分大医学部、大分県産婦人科医会などの協力により四人の医師を確保し、再開にこぎつけております。この中心的役割を果たした吉松教授は二〇一〇年度産科医療功労者厚生労働大臣表彰を受賞いたしました。このようにして「解体新書」の著者の一人である前野良沢、「房室結節(田原結節)」の発見者田原淳を輩出した豊前中津における中核病院の産科再開が果たされたわけです。

(竹下 正純 記)

出席者

前列左から…古林秀則(昭和四十九年卒業)、中村信一学長、竹下正純(昭和三十三年卒業)、児玉公道(昭和五十一年卒業) 後列左から…土屋寿司郎(昭和四十三年卒

業)、西郡修道(昭和五十年卒業)、鹿野泰昭(昭和四十六年卒業)、河野寛二(昭和五十一年卒業)、田中松平(昭和六十二年卒業)

兵庫支部

平成二十三年二月五日兵庫県支部総会が神戸市のチャイナタウン、南京街にある中華料理店で開催されました。折しも中国の旧正月にあたる春慶節の土曜日であったため、南京街は大変な人出でにぎわっておりました。

兵庫支部は平成十八年七月一日より新体制となり、支部長には昭和四十八年卒業の園田万史先生が就任されました。今年度の総会には十五名の先生方がご参加がありました。まず支部長よりご挨拶があり、次いで貝原弘章先生(昭和四十二年卒業)のご発声で乾杯をし、懇親会が始まりました。美味しい福建料理をいただきながらご出席の先生方の近況報告をいただき、また今後の兵庫支部の活動についての意見交換も行われました。特に平成年度卒業の方々の兵庫支部への登録が少ない現状に危機感が持たれ、若い先生方にも参加していただけるように働きかけることとなりました。

和やかな雰囲気でも流れ、参加者全員で記念撮影をし、懇親会はお開きとなりました。ご出席いただきました先生方は次の通りです。

貝原弘章先生(昭和四十二年卒業)、園田万史先生(昭和四十八年卒業)、日山英子先生(昭和四十九年卒業)、福原正博先生(昭和四十九年卒業)、山岸範明先生(昭和五十年卒業)、麻田達郎先



生(昭和五十一年卒業)、鹿子木基二先生(昭和五十一年卒業)、石田明人先生(昭和五十二年卒業)、太田稔明先生(昭和五十二年卒業)、裏辻雅章(昭和五十三年卒業)、今井信行先生(昭和五十六年卒業)、上田正登先生(昭和五十六年卒業)、太田秀一先生(昭和五十七年卒業)、中谷英幸先生(昭和五十七年卒業)、青木啓真先生(平成九年卒業)。

(裏辻 雅章 記)

愛知支部

平成二十三年六月二十五日(土) 昨年と同様、名鉄グランドホテル北京宮廷料理「涵梅舫」にて、第二十五回十全同窓会愛知支部総会が開催されました。梅雨明け前にも拘わらずの猛暑の中、本部



より加藤 聖先生（十全同窓会理事長・昭和四十八年卒業）をお迎えし、三十三名の参加者を得て開かれました。

副支部長・水上哲秀先生（昭和四十七年卒業）の開会のことばにより幕を明け、この一年に逝去されました清水佳吉先生（昭和二十四年卒業）・平井 孝先生（昭和五十三年卒業）・沢江源四郎先生（昭和三十一年卒業）・杉浦建生先生（平成九年卒業）の御冥福をお祈りし、全員で起立黙祷を捧げました。

次に、支部長・尾山 淳先生（昭和四十三年卒業）が御挨拶され、東日本大震災の教訓から、災害時には私ども医療従事者が市民から最も拠り所とされるという自覚を促されました。次いで、篠田雅幸先生（昭和五十一年卒業）による会

計報告および横田徳久先生（昭和三十五年卒業）による監査報告を全会一致で承認しました。その後、水上哲秀先生による協議事項及び報告に移りました。①会報「十全愛知」に新規開業された先生、院長・教授に就任された先生、会員による出版物を、紹介掲載すること ②全学同窓会連絡協議会出席の報告の上、岐阜・三重・静岡の各支部への今後の働きかけについては幹事会に一任すること が承認されました。

次に、尾山 淳先生の座長のもと、加藤 聖十全同窓会理事長より、「創立百五十周年記念事業について」と題する近況報告を拝聴しました。冒頭、医学部前身である加賀藩彦三種痘所（一八六二年創立）の所在地を赤祖父一知先生（昭和三十四年卒業）が突きとめられ、記念碑を建立するというホットなニュースをお伝え頂きました。その上で、記念メニューメント制作・プロムナード整備・記念式典（平成二十四年七月七日）開催 という記念事業の柱を説明頂き、同窓会員の積極的参加を呼びかけられました。本題の他に、東日本大震災後の同窓会員の安否情報を御報告頂きました。岩手・宮城・福島・茨城四県の八十名に連絡をとり、十名が安否不詳とされています。加藤先生は自ら四県の支部を訪問され、特に甚大な被害に遭われた大船・気仙沼の先生が紛失された学位記の再発行に御尽力されたことなどを紹介されました。さらに、加藤先生の専門の「中枢神経の再生」についても御紹介頂きました。魚での神経再生のデータをお示しされ、今話題のiPS細胞作製に用いられる四つの遺伝子の発現が上昇するという興味深い発見

を御説明頂きました。今後の哺乳類での神経再生の展望が期待される内容でした。

本年度の講演は、大原康壽先生（昭和六十年卒業）の座長で、南山大学人文学科日本文学学科教授 安田文吉先生に「信長・利家・家康と金沢・名古屋」と題してお願ひ致しました。安田先生は、歌舞伎・浄瑠璃研究の大家であられ、沢山の御著書の他、テレビにて古典芸能の解説もされてきました。最近では、河村たかし名古屋市長らが主導する「中部独立戦略本部」のメンバーにも名を連ねられ御活躍であります。「河村名古屋市長の名古屋弁は正確である」というお話に始まり、①「さま」が付く ②古語が生きている ③京言葉が入っている という名古屋弁の特徴・由来を御説明頂いた。そこから名古屋人気質へと展開され、名古屋の町人が実力を付けるに至った、徳川家康による政経分離（四男忠吉に名古屋で経済をさせた）・徳川宗春（尾張藩第七代藩主）による規制緩和について細かく解説頂いた。その中で、中川区荒子に生まれた前田利家（豊臣秀吉とほぼ同年）、その妻まつとの人生にも触れられ、名古屋と金沢の歴史的交流も興味深く拝聴しました。弁舌明瞭でわかりやすい講演で、時間が短いのが大変残念でした。

記念写真撮影の後、最年長会員・春日井達造先生（昭和二十年卒業）の音頭で乾杯し懇談の場となりました。各先生方から御挨拶・近況報告を頂き、世代を超えて交流を深めました。中でも、曾我恒夫先生（昭和二十五年卒業）からは、室生犀星の自伝小説「杏っ子」の主人公が憧れた「月曜美人」のモデルが名古屋市長在任の野村欽一先生（昭和二十年卒業）

の御母堂であると判明したニュースを提供頂きました。

最後に最年少参加会員・工野玲美先生（平成二十年卒業）・澤田 翔先生（平成二十一年卒業）の音頭による万歳三唱を行い、水上哲秀先生の閉会のことばで、再会を誓つての散会となりました。

（高味 良行 記）

## 東京支部・ 神奈川支部合同総会

東日本大震災を受けて、暑い夏ながら節電最中の東京・銀座において、本年も同窓会を開催した。場所はここ数年開催



しているライオン銀座七丁目店六階クラシックホールである。関東の四高同窓会が例年開催されるホールでもあり、本同窓会にはふさわしい。

本年も、昨年に引き続き、神奈川県支部との合同総会となった。参加人数は東京支部から二十名、神奈川県支部から十名、千葉県支部から二名であった。

まず、午後五時から、十全同窓会長佐藤保先生より十全同窓会本部よりの近況報告をお聞きした。金沢大学医学部の建物のこと、入学状況のこと、十全同窓会全体の動きなどをお聞きした。例年のことであるが、拝聴していると、金沢に居るかの如くの錯覚に陥る。

五時二十分から講演会に移った。本年は、西島背椎クリニック院長西島雄一郎先生による「腰痛―外科的治療のCono Date」と題した腰痛治療の最先端の講演であった。西島先生は金沢医科大学整形外科教授の後、平成十四年から調布市で現在のクリニックを開業されておられる。顕微鏡、レーザーを用いて、できるだけ傷をつけずに安全、確実な手術を行うことで有名な整形外科医であり、都内はもちろん全国から患者さんが来院されるゴッドハンドドクターである。うわさではオペ待ち数年とか。

六時から本会の長老であられる昭和二十五年卒業の日本歯科大学名誉教授古本啓一先生の乾杯の発声とともに懇親会となった。その後は、参加者一人ひとりから近況を聞きながら、歓談のひとつきとなった。退職されても基金や検診でこれまでの医療経験を発揮されておられる先生、院長として第一線で活躍の先生、いろいろな先生方の近況をお聞きするこ

とはいつものながらとても楽しいものとなった。二時間があつという間に過ぎ、全員の写真撮って中締めとなった。来年も八月に合同総会とすること、埼玉県支部など近隣の支部にもお声をかけることが決議された。

(内潟 安子 記)

## 山梨支部

平成二十三年度(第十四回)金沢大学医学部十全同窓会山梨支部総会が九月十日(土)、例年同様甲府の老舗ホテル「古名屋ホテル」で開催されました。毎年九月の第一土曜日が開催日と決まっておりますが、幹事の藤井秀樹(昭和五十四年卒業)が九



月九日、十日に甲府で学会を開催する関係から第二土曜日になってしまい、出席の都合がおつきにならない会員が多く、九名の出席にとどまりました。例年のごとくまず講演会から始まりました。今年度は杏林大学医学部感染症学講座教授の神谷茂先生(昭和五十三年卒業)に「ヘリコバクター・ピロリの病原性―クオラム・センシングとバイオフィルム形成―」という演題でご講演いただきました。ヘリコバクター・ピロリと胃発癌から始まり、細菌同士がオートインディューサーを介し、「会話」しその細胞内シグナルを変化させ病原性を調節するというクオラム・センシング、さらに今後創薬につながる可能性の高いバイオフィルムについてと非常に興味深い講演でした。

神谷先生のますますのご活躍をお祈り申し上げます。ついで事務局から事務報告がなされ、まず幹事がよく失念する集合写真を撮りました。残念ながら、秋山嘉門先生(昭和四十四年卒業)が急用でお帰りになられました。

会場をかえ、小林哲郎支部長(昭和四十九年卒業)のご挨拶の後、加田孝治名誉支部長(昭和二十九年卒業)の乾杯のご発声の後懇親会にはいりました。今年度は竹田亮祐先生と佐藤保先生にお越し頂きました。ルミエールの赤、白ワインを楽しみながらまず、竹田先生から金沢大学全体が目指すグローバル社会を目指す人材育成、全学同窓会の改変などのお話があり、頂いた「アカンサス」を練りながら母校への誇りを再認識いたしました。また、佐藤先生からは医学部同窓会の一周年の取り組みに付きお話しいただきました。途中で松澤高光先生(平成十八年卒業)も加わり、十一名がそれ



ぞれに懇親会を楽しみました。最後に松澤先生も加わり再度集合写真を撮り会もお開きとなりました。来年度の金沢大学医学部十全同窓会山梨支部総会は平成二十四年九月一日の予定です。

今回は集合写真が二葉ありますが、二葉とも掲載していただければと思います。せっかくですので集合写真で会員をご紹介させていただきます。本文中にお名前が出た先生はお名前だけ、また敬称は略させていただきます。

**集合写真一** 前列右より田辺護二(昭和四十七年卒業)、秋山嘉、佐藤、竹田、小林、神谷、加田、後列右より藤井、松澤仁(昭和五十三年卒業)、蜂須賀所明(昭和六十二年卒業)、秋山敬(昭和五十年卒業)

**集合写真二** 後列左 松澤(高)  
(藤井 秀樹 記)

クラス会

山形での三九会

(昭和三十九年卒業)

今年、酒田市本間病院理事長の中島良明君が幹事を引き受けてくださって、平成五年以来二度目の山形県での三九会が五月十四日(土)に開催されました。

当日午前九時半に宿泊先の「かんぼの郷酒田」を出発、庄内観光に出かけました。まず、日本屈指の大河「最上川」をバスで上流へと向かって、乗船場に到着しました。芭蕉翁の「五月雨を集めてはやし最上川」のとおり、満々と広がる水面がとうとうと流れていました。兩岸の山々には立山杉と同じく数百年から千年以上の天然杉が藪の中に繁り、船と共に移りゆく新緑を眺めながらゆったりとした時間を過ごしました。

次に、出羽三山の一つ、羽黒山に向かいました。随神門をくぐってしばらく参道を歩き、巨大な杉の鬱蒼とした林の中に降り立つと、そこは神が宿るような儼かな空間でした。ごうごうと流れ落ちる滝の音を聞き、身も心も清められる心地でした。古色蒼然とした国宝五重の塔が東日本大震災の揺れにも耐えたのを眺めて、先人の技術の高さに感銘を受け、急角度の葺ぶきの大屋根が圧倒的な本殿は大池の向こうにどっしりと佇んでいました。

それから、庄内映画村に着き、数々の映画が作られた宿場町、農村、漁村等のセットを見物してホテルに帰着しまし



卒業後四十七年目の三九会の宴会は夕方七時頃に、級友十五名、奥様方七名、合計二十二名が出席して始まりました。当日は濃い霧が庄内地方に発生したため、四名の出席予定者を乗せた飛行機が空港付近まで飛来しながら着陸できず、やむなく羽田へ引き返したことは残念でした。

互いに一病息災で遠く酒田まで来られたことを喜び祝杯を挙げました。幹事の中島君が心尽くしで呼んで下さった相馬楼の舞姫たちが庄内の歌や踊りを披露してくれた頃には、宴は最高に華やき、和やかで楽しいくつろぎの時間でした。以



前の三九会の話と云えば、医療費の引き下げ、厚労省の政策が目まぐるしく変わることや日本医師会の対応等で不満をぶちまけたり、慰めたりで、けんけんごうごうとしていましたが、近年はみな歳をとったせいか、諦めたせいか、責任のある立場を退いたせいか、比較のおとなしくなってお互いの健康に関する話題の比重が大きくなったような印象でした。翌日は大多数の皆さんは中島君の奥様の案内で酒田市内観光で山居倉庫や本間家旧本邸など歴史ある風情を満喫し、中島、土屋、中村一郎、藤村、米倉の五名は湯の浜CCでゴルフを楽しみました。(参加者) 安積宏明、同夫人、有川 功、同夫人、岩佐嘉郎、同夫人、中村一郎、同夫人、三嶋 勉、同夫人、宮城徹三郎、同夫人、加納勝利、小林宣泰、土屋良武、野垣俊幸、福島克治、藤村和昌、矢吹朗彦、米倉幸人、幹事 中島良明、同夫人 (藤村 和昌 記)

卒業約二十五周年同窓会の報告

約一年の準備期間を経て、昭和五十五年入学または昭和六十一年卒業生の同窓会を平成二十三年七月十七日(日)にホテル日航金沢で開催しました。

同窓会に先立ち講演会「金沢先進医療フォーラム」において原田明久先生の医薬品開発、影近謙治先生のリハビリテーション、横井宏佳先生の最前線に立つ臨床医からの主張をテーマとする講演を堪能いたしました。若い頃に学んだ仲間

の奮闘振りに、大いに刺激を受けました。同窓会はゲストに恩師熊本大学名誉教授児玉公道先生を迎えて総勢五十名の出席でした。

吉崎智一先生のスピーチ(母校の現状報告と医学部百五十周年記念事業への寄附のお願い)と乾杯の挨拶にはじまり、児玉先生の講話、参加者の一言スピーチを楽しみ、米沢在住の石橋正道先生のスピーチ(東日本大震災への支援の要請)と一本締めで中締めとなりました。ホテル内の二次会会場への移動を促すためにひと工夫を要するほど、参加者の話が尽きない様子でした。児玉先生も遠路はるばる熊本よりお越し頂きありがとうございました。

二次会も四十名の出席があり、街明かりの夜景を眺めながら旧交を温めました。河岸を変えて三次会、さらに麻雀となでしこジャンルの決勝戦を朝まで楽しんで強者もいたとか。基礎体力の差を感じさせるエピソードでした。

翌十八日の九州地方の天候不良により宮崎から参加した伊井敏彦先生は、飛行機が欠航して帰宅に苦労されたでしょう

医師会コーナー

平成二十三年度

医薬保健学域特別講義

小川 純

が、懲りずに次回も参加して下さいね。  
多くの同級生や幹事の藤本敏博先生、  
由雄裕之先生に助けていたいただいて無事に  
開催できたことに、この場を借りてあら  
ためて感謝申し上げます。

(絹谷 啓子 記)



震災の影響により前号より用紙の質  
が変わっております。しばらくの間  
ご不便をおかけ致します。

金沢大学医薬保健学域医学類一年生に  
対する特別講義も今年度で四回目を数え  
ることになった。石川県医師会が中心と  
なり、臨床現場で働いておられる先生方  
から学生にお話をしていただくものであ  
る。今年度は第一回の六月二十一日(火)  
から第五回の七月十二日(火)まで、一  
週間に一度、合計五回にわたり各九〇分  
の講義を行った。内容は以下のとおりで  
あった。

一. 日本の医療制度、世界の医療制度

石川県医師会 会長

小森 貴 先生

芳珠記念病院 小児科

多賀 千之 先生

小森会長からは本年三月に発生した東  
日本大震災において県医師会が派遣した  
JMATの活動につき報告、そして医療  
制度全般、医師会、また医師の心構えな  
どをお話していただいた。多賀先生か  
らのご自分のアメリカ留学時代の経験を  
交え日本の医療制度の優れた面を紹介  
いただいた。

二. 各診療科、現場からの声

石川県医師会理事 内科

洞庭 賢一 先生

石川県医師会理事 外科

大平 政樹 先生

石川県医師会理事 精神科

前田 義樹 先生

きたまちクリニック 小児科

野崎外茂次 先生

石川県立中央病院 産婦人科

朝本 明弘 先生

石川県医師会理事 内科

小川 純

各自自己紹介の後、三グループに分か  
れた学生のテーブルに行ってディスカッ  
ションしてもらった。講義形式と違っ  
て学生はしゃべりやすかったとみえ、好  
評であった。

三. 女性医師の体験談

石川県立中央病院 麻酔科

高橋 麗子 先生

女性医師のお話はいつも学生に人気  
がある。やさしい口調の語りには快い時間  
であった。

四. 勤務医の体験談

石川県立中央病院

研修医 松井 崇生 先生

研修医 南部 早和 先生

研修医 武田 仁浩 先生

研修医の話には学生は大いに興味があ  
るらしい、これからの学生生活や研修医  
の生活について実体験をお話しいた  
いだ。

五. 在宅医療

大場医院 斉藤 元泰 先生

昨年に引き続き在宅医療の話をして  
いただいた。在宅で繰り広げられる家族  
ぐるみの診療に目を見張ったのではない  
だろうか。

六. 過疎地域医療の体験談

石川県立中央病院 循環器内科

寺本 了太 先生

研修医 岡本 真琴 先生

過疎地域とくに舭倉島での離島診療の  
経験談は学生にきつと新鮮に映ったに違  
いない。

七. 検診について

羽柴クリニック 羽柴 厚 先生

金沢市すこやか検診について話をし  
ていただいた。実際のレントゲン写真や内  
視鏡写真を学生に見せてどこが異常だ  
と思う?などと学生に質問をしながら進め  
られた。まだ何の医学知識もないはずだ  
が、結構所見を指摘するには驚いた。

八. 医師会について

石川県医師会理事 小川 純

石川県医師会、日本医師会について解  
説した。医師会活動について多少なりと  
も理解してくればいいのだが:。

学生も、若い研修医からベテランの開  
業医まで第一線で活躍する医師による話  
を聞いてよかったと思う。今後、できれ  
ば一年生だけではなく、五、六年生に話  
を聞いてもらいたいと思っている。今回  
ご参加いただいた十六名の先生方に感謝  
を申し上げます。

# 医学部百五十年史のための覚え書【32】

## 大石川県時代の県管轄病院・分病院で活躍した金沢医学館関係医師

### 赤祖父 一知

明治九年（一八七六）越中・加賀・能登・越前嶺北を併合した大石川県が成立し、金沢病院・同医学所を中心として、翌明治十年（一八七七）に福井・富山の両県立病院にも医学所が併設された。

この石川県管轄の三県立病院・医学所で指導者として活躍したのは、津田淳三、大田美農里、田中信吾、高峰精一（元種）、鈴木儀六、馬島健吉、松田壬作、横井三柳、伏田元幹らスロイス、ホルトルマンの来任後これに従った金沢医学館関係の医師であった。

病院・学校の変遷については、これまでの「覚え書」に記載したごとくであるが、明治十三年（一八八〇）に至り、富山病院から高岡、魚津に、金沢病院から杉木新、大聖寺、七尾、輪島に、福井病院から武生、坂井港などに出張所・分病院が夫々設立された。これらの病院や分病院に赴任・出張したのは、図に示すごとく、前記の金沢医学館の主力医師と同医学館に入学し卒業した医師たちであった。

金沢医学館の第一回の卒業生は、明治三年（一八七〇）開設の金沢藩医学館に入学し、同四年（一八七一）三月スロイス着任の初年よりこれに従事修学し、スロイス帰国の明治七年（一八七四）九月には殆ど成業していた。明治八年（一八七五）六月の医学館の県移管とともに金沢病院・同医学所に任用され、さらにその多くは同年（一八七五）八月に着

任したホルトルマンに従って医師を修め、病院医学所のスタッフとなり活躍した。

第一回生九名の氏名とその赴任先は、藤井貞為（富山病院・高岡分病院長）、上杉寛二（福井病院・武生出張所長）、稲坂謙吉（金沢病院・大聖寺分院長）、藤本純吉（金沢病院・福井富山病院に出張）、宮北徳（金沢病院・七尾出張所に派出）須賀忠愛（富山病院・のち高岡？）以上奉職履歴―不破鎮吉（金沢病院・富山病院・一四二二号）、上出達三（不詳・一三五三号）―以上試験合格―三澤敬吉（不詳）で、その多くは前号で示したごとく、卒業後の奉職履歴によって内務省医師免状を下附された。

明治五年（一八七二）に入学した第二回以降の卒業生は、明治九年（一八七六）布達の「石川県医制」により、翌年（一八七七）より始まった医師開業試験（医籍編製の旧試験）を受けることになり、これに合格して内務省医師免状を取得することになった。能登その他の地区に短期出張した村上直恵（二七一号）は第二回、稲坂三吉（二九六九号）は第四回の卒業生である。

なお、医学部創立百五十周年記念事業として、明治前期に現在の北陸三県で活躍した医学館第一回卒業生の群像をモチーフとした記念モニュメントが、金沢美術工芸大学石川教授によって制作され、医学部構内に設置される予定になっている。

## 大石川県時代の県管轄病院・分病院における金沢医学館関係医師の動静

加賀・越中・能登国（明治9年～同16年）  
越前国嶺北（明治9年～同14年）



●病院・医学所/医学校, ●出張所/分病院  
氏名○内数字は卒業回数, M (明治) 年 (赴任/出張)

## 十全昔話

## 泉学寮余話

十全同窓会能登支部長  
佐原 吉博 (昭和三十六年卒業)

昭和三十年、学校制度が変わり、私達のクラスは六年制医学部の一期生となった。

その頃、金沢大学の学生寮は泉学寮、北溟寮、北斗寮、白梅寮(女子)の四寮があった。

私が入った泉学寮は金沢市泉本町の北陸鉄道石川線沿線で、市電野町駅(始発駅)から五分程の所に在り、旧制金沢医科大学から続いた寮だった。昭和二十一年五月、終戦後まもない頃で住宅事情も悪く、学生寮の設置を要望する声が多くあり、旧制金沢医科大学の外郭団体だった財団法人済美会が津田駒工業株式会社社員寮を買取り、大学側に貸し付けて学生寮としたことが始まりで、後に大学側に有償譲渡した。

建物は木造二階建て(四〇四・五㎡)で十五畳の部屋が二十一室あり、三十六畳の大部屋(食堂)は一階、二階には十五畳の大部屋の他に十二畳、九畳、八畳、六畳が各一室、三畳の小部屋が二室で、計二十八室あり、内二十三室を居室に使っていた。定員は六十名で、当時、寄宿料は一〇〇円、食費その他を合わせて二、〇三〇円が毎月の納入額となっていた。因みに授業料は年額三、六〇〇円だった。

昭和四十年に鉄筋四階建てに建て替え

られるまで、この寮は理系学生寮であったが、殆んどが医学部の学生で、他は数名だった。新入生は一階の十五畳の部屋に三人ずつ入ることになっていた。建物はかなり老朽化し、部屋は何時掃除をしたのか分からない程、汚れが染みついてしたが、それでも、住めば都で快適な寮生活を始めた。

入寮して間もないある晴れた日曜日の昼下がり、突然雨が降ってきたので慌てて窓を閉めたが、様子がおかしいので覗いてみると、なんと放尿の最中で吃驚した。どうやら、便所にいくのも面倒と窓からすることになっていたので、以後、所定の場所下の窓は閉めておくことにした。新入生から見れば、学部の三、四年生の先輩は随分と大人であり、当時は陸士、海兵、予科練からの転身組も交え、旧制四高の蜜カラの気風が色濃く残っていた。平生着ているよれよれのドテラで香林坊に行き、一服していたら乞食と間違えられたなどの話は枚挙に遑がない。昭和三十三年、売春防止法が施行されてからは、近くの遊郭も表向きは廃業していたが、医学部の学生さんということで、いい思いをしていたのも束の間、卒業してから追いかけられ大汗をかいたムキもいたそうな、そんな時代だった。

教養部の頃はアルバイトと言っても家庭教師くらいで、仕送りの乏しい寮生は何時か懐が寂しく、色気よりも食いがかった。寮の浅いドンブリに盛り切りの飯ではとても腹の足しにはならなかった。ただ、味噌汁の方は何杯でも自由となっていたので、賄いのおっちゃんが大鍋を持ってくると、底に沈んだ実を杓文字でそっと掬い上げるのが旨くなった。

麻雀は大流行だったが、無い者同士、当初は点一と言っても千点一円という可愛らしいものだったが、それでも皆真剣だった。

甚も盛んで相手に事欠くことは無かった。寮監がまた碁キチときており、新入生の顔を見るたびに声がかかった。当時初段くらいだった寮監に最初は置き碁から始めたが、碁は私に向いていたのか、数ヶ月後、反対に置かせるようになる、声が掛からなくなった。しかし、寮には強い先輩も多くいて鍛えられた。医学部の囲碁部に入らず、新潟大学囲碁部との交流試合で新潟に行くと、七尾高校の先輩がいて、他流試合でも鍛えられた。学生時代は免状を貰うカネがなかったが、一番花だったと思っている。

一方、向いていなかったのは、当時流行のダンスだった。医学部の各運動部は資金集めのため、競ってダンスパーティを主催したが何時も大入り満員だった。勿論、寮主催もあった。同室のIはダンス教師の資格を持っており、選挙権にも出ているほどの腕前だったので、暇があると教えて貰ったが、どうも旨くないから。生来音痴の私はリズム感が悪く、何回やってもテンポが合わず、破門となった。

学部の三、四年生になると、インターンと称してアルバイトの口が多くなり、懐具合が良くなった。健診、辺地の診療所応援、代診など、インターン生だけでは手が回らない時に声がかかった。日当も学生にとっては高額で月に数回で随分潤った。授業は勿論サボっていった。そして学四(六年生)になるとかつての新入生も二階の個室か二人部屋の住人とな

り、伝統のドテラを着て殿様然としていた。麻雀もレートが高くなり、卒業試験の前日は決まってご開帳となったが、全員無事卒業。古き良き時代だった。

時を経て、県医師会の理事をしていた平成八年頃、二年後輩の藤田士郎先生(金沢市)も理事をしていて、期せずして泉学寮のOB会を開こうということになった。早速、藤田先生が世話役になり案内したところ、全国各地からかつての寮生が続々参集し往時の話に花が咲いた。しかし、年を経る毎に元氣印が少なくなり自然休会となった。

さて、新制金沢大学が昭和二十四年に発足して昭和二十九年迄は難関の医学部進学課程(理乙)に入っても、二年終了後、本試験と云うべき医学部受験(全国いずれも可)があり、気の抜けない制度になっていた。一方、私達のクラスは最初から医学部になり、入学後は大学生活を満喫した。但し、関門があり、専門課程に進む時に理数で躓き、学内留年一期生になったのもいた。

卒業して半世紀、まだまだのつもりは今である。





## 学生コーナー

## 扇子

岡 直輝

この日の病理学の講義の担当は外部から来られた先生で、先生はモニターに画像を映し出し、どこに異常がありますか、と皆に問いかけながらレーザーポインターを私に差し出しました。それを受け取り考えたもののハッキリとした結論が出なかつた私は、この辺りです、と異常だと思われる部位をえいと指しました。すると先生は一言「センスないな。」あなたは医師に向いていません、即刻医学部から去りなさい。彼の言葉からそんなニュアンスを感じ取り怒髪天を衝いた私はレーザーポインターの紅い光で彼の頭を納豆を混ぜる様に指しこう言いました。「ここに異常があります。」……もちろん私の頭の中での話です。話は変わりますが、私の部活の友人は私が部活中に不意に口からこぼれた、センスねえなあ、という一言を今でも覚えており、時々お前にはこんなヒドイ事を言われたと夕暮れ時に兼六園上空を飛び交うカラスの様にギャアギャア騒いでいます。このように人はあなた不細工ですなと言われても聞き流せるのですが、センスがないですなと言われると心底気にするものです。しかしこのコンプレックスは解消可能、なぜならばセンスとは磨くものだからです。

申し遅れました。私医学類四年生の岡直輝です。簡単に自己紹介をさせていただきます。東京の中高一貫校出身、成績

は中の下、一度教科書を読めばすんなりと内容が頭に入ってくるといった才能はなく努力型平凡タイプ、所属している部活は中高時代と同じくバスケットボール部。二・三年生の基礎医学では、講義、実習を通じてじつくり学んでいくのに対し、四年生の授業は週一回の臨床手技実習以外はひたすら講義で信じられないほど膨大な情報が私たちに投げかけられています。そんな渦中の私がこの文章の出だしてひたすらに「センス」という単語を用いているのは、最近「センスがなければ平凡に埋もれてしまうな。」と感じているからです。この思いは出世したいとかそういう類のキラキラした欲望ではなく、世界の「最新」を導入し一人でも多くの患者を救えるような、1%でも成功率の高い手術を施せるような医師になりたいという単純な欲求から来るものです。心に留めている金子先生（第一内科教授）の言葉があります。「将来君たちが医師として活躍するおよそ二・三十年後、医療はどれだけ進歩しているか分からない（金子先生には大体分かるらしいのですが）。学生時代勉強よりもゲームや遊びの中でひたすら三次元の感覚を養っていた同期の仲間の方が、よく勉強していた仲間よりも現代の手術器具を使いこなせている。人生は本当に何が起るか分からない。学生時代勉強するなら解剖学、生理学、診断学など普遍的な学問だな。」このメッセージから私は二つの事を学びました。一つは受験界でも口を酸っぱく言われている事ですが基礎を疎かにするなということ、もう一つは将来を見据えて行動しろということ。ただ後者は実に難しく、まだまだ医学の

素人である私にとって医学界の二・三十年後というものは再生医療の実現化程度しかイメージできず、実際に何を優先して行動すればよいかよく分からないのです。タイムマシーンでもあれば話は別ですが。ならば現在の医学界で有名な、つまり時代の最先端を走っている内科・外科問わず様々な分野の先生方から「時代を先読みするセンス」もしくは「時代のニーズに合わせるセンス」を盗んでしまえばいい、今の私はそんな事を考えています。

具体的に何をしているかと言えば、有名な医師の講演会・勉強会などがない場合にアンテナを張ること。先日、内視鏡専門医を目指す医師のための講演会が開かれたのですが、そこには特別ゲストとして王貞治さんの胃がん手術の執刀医・宇山先生をはじめ東京医科歯科大の小嶋先生など内視鏡のスペシャリストが招かれていました。この講演会に興味を持ったのはテレビで胃がん外科手術のスペシャリストとして先のお二方が紹介されたからであり、その後ロッカールームに貼ってあったポスターが偶然目に留まったからで、あの時たまたま暇でテレビを見ていなければあの貴重な場に出席する事はなかったと思います。その講演会は北陸三県の病院から選ばれた若手医師が執刀した内視鏡手術の録画ビデオが放映され、ゲストから技術的な問題点の指摘や、どういった思考の下その手技をこの場で行うのかといった疑問の投げかけが行われました。とても専門的な講演会であったため、会場では「ポート部位が…」「No.6が…」といった専門用語が飛び交っており、正直ほとんど理

解できませんでした。しかし宇山先生がおっしゃっていた、闇雲に探すのではなく一つ軸を決めそれを中心に探していく、といった人生にも当てはまりそうな言葉や、小嶋先生にテレビで見生じた疑問を直接質問でき上級の先生方の思考法を感じ取る事ができました。また録画ビデオではありますがスペシャリスト達の手術が見られたり、さらにゲスト達の上品な立ち居振る舞いを観察したりなど様々なものが得られたと思います。

私の中高時代のバスケット部では本音で語り合うことが美德とされてきました。本音で語るこそが相手のためになる、そう信じていた岡少年は数々の言葉の刃を友人達に向け傷つけてきたのではないかとふと思い返すことがあります。やはり相手には感情、物には言い方というものがあり、発言者の醸し出す雰囲気、表情、紡ぎ出した言の葉など様々な要素が絡み合い、良くも悪しくも結果として相手に影響を与えようという至極簡単な事実が理解できなかったように思います。相手の些細な感情の揺らぎを見逃さないセンスを身につけ、スパイスの効いた言葉のストックを増やすために、最近はいくつ映画を観たり小説・漫画を読むようになりました。怪我・病気に悩む人のすべてを優しく包み込めるような器の大きな人になるために、思い切つて旅に出るようになりまして。すべてはセンスを磨くために。

## 平成二十三年度 オープンキャンパス

八月四日(木)、五日(金)の二日間にわたって医学類オープンキャンパスが行われた。今年度、オープンキャンパスへの参加者は医学類のみで計四五三人を数え、以前にも増して盛況であった。

参加者の内訳を見ると、高校一年生と二年生が約八割を占め、高校入学後早い段階から医学部への関心を持って



ることが伺えた。また、都道府県別では北陸三県からの参加者が最も多く約七割を占めたが、それ以外に中部、近畿、関東、更には鹿児島県からの参加者もあり、医学類オープンキャンパスが地域を越えて広く知られるようになってきている印象を受けた。

内容については、四日及び五日の午前または午後を二クールとして、計四クール、ほぼ同様の内容を行った。具体的には、まず「金沢医科大学時代の教育・研究・診療風景」のDVDを鑑賞してもらい、医学類の歴史伝統について触れてもらった。続いて、井関医学部長から「医学類の入試概要」及び「医学類の教育概要」について、及び医師を目指す上での心構えや医師に求められている資質等についての説明が行われた。その後、堀学生支援委員長から「医学類の学生生活について」、特に学生支援態勢、サークル活動、医学展などについての説明がなされた。いずれもスライドを使った説明で、わかりやすいと

## 十一月五日(土) 開催 金沢大学学友会設立総会・第五回ホームカミングデイのご案内

卒業生のみならず 青春の思い出一杯の金沢へお越しください!

五回目を迎えるホームカミングデイは、第四十八回金大祭開催期間の十一月五日(土)午後開催されます。八月下旬から順次、案内状の発送と広報用チラシ(申込ハガキ付)の配付が始まり、専用のホームページも開設しています。今年度は、発展を続ける母校の「今」を

紹介するとともに、多彩なホームカミングデイ企画を準備し、文字どおり「卒業生が母校に帰って終日楽しく過ごす日」とする予定です。金沢城公園の五十間長屋では、全学同窓会「金沢大学学友会」の設立を記念するパーティ(有料・先着一五〇名)を計画いたしました。ぜひ、ご家族とご一緒に、また同期会やサークル仲間などにも広く声をかけていただき、晩秋の金沢にお越しくださいようお待ちしております。



昨年に引き続き出演する桂まん我さん



皆様のお越しをお待ちする中村信一学長

好評であった。最後に、参加者と教員、在学生との懇談会が行われ、井関医学部長、堀学生支援委員長の他、教育委員会から二クールにつき一名、計八名の教授及び准教授に出席してもらい、医師や医学者としてのやりがい、医学部志望の動機等について経緯談を交えて語ってもらった。また、医学類学生代表として三〜四名の学生にも参加してもらい、高校時代及び大学に入ってから勉強法、サークルとの両立などについての生の意見を伝えてもらった。

この他、午後の二クールでは医学類での講義を高校生向けにわかりやすくした「模擬講義」が行われた。四日は身近にある「食中毒」と言うタイトルで清水徹教授に、五日は「認知症を知る、治す」と言うタイトルで山田正仁教授にお願いした。いずれも日常生活に極めて関わりの深いテーマであり、「大変興味深い内容で面白かった」という意見が多く聞かれた。

参加者に行ったアンケートでは、「医学類のイメージがより具体的になった」、「医学に対する興味がより深くなった」、「模擬講義が大変わかりやすかった」、等の意見が数多く出された。今後もオープンキャンパスを通じて社会の特に若い世代に金沢大学医学類の紹介をしていく重要性を強く感じた次第である。(学生支援委員長 堀 修 記)

### 編集後記

東日本大震災から半年が経ちました。加藤同窓会理事長のご報告にありますように死亡や行方不明の会員はおられませんでしたが、大きな被害をうけられた被災地の同窓生各位に対し、会員一同、改めて心からお見舞い申し上げます。

当時、大船渡病院で診療にあたられた小山田先生のご報告は、体験者だけが書ける事実の強い力で私どもに訴えてきます。

衛生学の橋本和夫名誉教授がご逝去され、門下生の谷井先生が追悼文を寄せられました。音楽にも造詣が深く、暖かいお人柄から多くの学生に慕われた先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

十全同窓会総会の記事には、本会の決算や予算、来年七月七日に行われる記念式など百五十周年記念事業の概要、堀教授と尾崎教授のご講演などが紹介されています。特に、赤祖父先生の特別講演「彦三種痘所について」では種痘所の具体的な場所が示されており、過去と現在が繋がっていることを実感します。また、百五十周年記念事業の進捗状況は、井関学類長のご報告に詳しく記されています。

「十全学術行脚」では金沢医科大学が紹介され、同窓の諸先生の学術・運営両面における活動内容を知ることができます。次号に続く連載ですので、是非ご読下さい。また、各支部やクラス会の報告は読むものに同窓生の深い絆を意識させ、叙勲や受賞などの報告は、同窓会員の活躍を端的に知らせてくれます。皆様からのご寄稿をお待ちしていますので、お気軽にお寄せ下さい。

次回の会報は、医学部創立百五〇周年にあたる平成二十四年一月発行の第二五〇号です。「二五〇」という数字の一致に、何か因縁めいたものを感じずにはおられません。先日行われた編集部の記念座談会の模様も掲載されますので、ご期待下さい。(編集委員 大島 徹)

- ◎参加費 無料
- ◎申込締切(二次) 十月二十一日(金)
- ◎申込み・プログラム等の詳細は左記まで
- 【金沢大学学友会支援室】
- TEL 〇七六―二六四―五〇八一
- FAX 〇七六―二三四―四〇一五
- メール gakyu@adm.kanazawa-u.ac.jp

(学友支援室長 西谷 公作 記)